

渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館

藤元 直樹

はじめに

森鷗外は徳川時代の事績を調べる基礎資料として武鑑に着目し、その収集の過程で多く「弘前医官渋江氏蔵書記」という蔵書印を捺されたそれを手にとることになった。また帝国図書館に蔵されていた『江戸鑑図目録』に見える武鑑という形式の書物の発生時期についての考察が、自分の結論と同じであったこと、そしてこの書物にも同じ蔵書印があったことから、鷗外は「渋江氏」すなわち渋江抽斎への興味を大きくかき立てられていく。

世評の高い史伝『澀江抽斎』執筆の契機を、簡単にまとめると以上のようなものになる。

ここから、鷗外が帝国図書館をしばしば利用していたのではないかと、そして帝国図書館には多く抽斎旧蔵書が蔵されているのではないかとと思われる方も多いのではないだろうか。ところが鷗外は『伊沢蘭軒』（その90）に以下のように書く。

「わたくしは蔵書の乏しい癖に、図書館には疎遠である。吉永氏の書を得た後、未だ一訪するに及ばない。識る所の書估の云ふを聞くに、江戸黄蘗禪利記は所謂珍本ださうである。買ひ求むることはむづかしさうである。或はわたくしも早晚遂に図書館に趨らざることを得ぬかも知れない。」

一方、抽斎旧蔵書に関しては、その二男で1851（嘉永4）年矢島玄碩の末期養子となった矢島優善（1835～1883）が盛んにその蔵書を持出して売り払っていたといわれている。3万5千部あるとされた蔵書は1860（万延元）年には、1万弱となっており、その2年後の1862（文久2）年に目録を作ってみると3千5百部となっていたという。さらに1875年、嗣子保が浜松県に赴任するにあたって預けた抽斎の日記類を含む書物は、親類の不注意で全てが失われたと

されており、帝国図書館成立以前に抽斎旧蔵書の散逸はほぼ完了していたのである⁽¹⁾。

現在のところ、当館の所蔵資料で抽斎の蔵書印が確認できている書物は30点(内6点は戦後の受入)のみであり、帝国図書館＝国立国会図書館と鷗外／洪江抽斎との関わりは意外なほど薄い。

ところが、抽斎旧蔵ではない、その没した後の洪江家で記されたと思われる稿本や写本が明治30年代に帝国図書館の所蔵に帰していた。その存在については、森銑三がすでに「帝国図書館には、洪江家の蔵書が大部分はひつてゐます、丹念に調べたら、まだまだ著書なども出て来さうに思はれます、」と指摘している⁽²⁾。

本稿では、この洪江家に由来する資料群について紹介する。そして、森鷗外の『澠江抽斎』において、ほとんど描かれなかった抽斎の嗣子洪江保の後半生に目を向け、博文館での著作活動を中心に、大きく変化する時代の中で苦闘した一人の人物に光をあて、関連資料を提示していく。

本稿での年代表記は西暦を基本とし、慶応年間までの年代について適宜元号を補記した。なお1873年改暦以前の月日表示は和暦のそれである。

1. 抽斎嗣子洪江保のプロフィール

洪江保は1857(安政4)年江戸に生まれ、医家であった抽斎の遺したプログラムに従い学問を修め、その幼年時代を過ごしていく。しかし、1868年、維新の騒乱の中で本国である弘前へと移り、若くして藩の助教となった洪江は医者ではなく、漢学者の道を歩みはじめる。時節柄、藩の支給する禄は減っていくばかりであったため、英学によって身を立てることを決意し、洪江は、1871年上京して尺振八の共立学舎に入門する。

英語を学び、わずか1年にして編訳書を出版する早熟ぶりを見せ、1872年に師範学校へ第一期生として入学した洪江は、1875年の卒業の後、浜松へ赴き教師として活躍するが、1879年東京に戻り、更に慶應義塾に学び研鑽を積む。優秀な成績で卒業し、1881年愛知で再び教師となるも、1年で東京に戻り、攻玉社と慶應義塾で教壇に立つ。1884年には『東京横浜毎日新聞』の記者となるが、体調不良を理由に1885年遠州周智郡へ退隠する。

翌年、静岡に移り教師としての活動を再開し、さらに『東海暁鐘新報』に招かれ主筆となる。

1890年には再び東京へ出て、書肆博文館の求めに応じ、矢継ぎ早に様々な著作を書き下ろして行く。森鷗外が「しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻訳で、その刊行する所の書が、通計約百五十部の多きに至つてゐる。其書は随時世人を啓発した功はあるにしても、概皆時尚を追ふ書估の誅求に応じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。そして保さんは自らこれを知つてゐる。」（『澀江抽斎』（その112））と記す所である。

実際のところ、鷗外は作品としてのバランスとプライバシーを勘案しつつ筆をすすめており、1897年初刊の『世界格言』が大正年間に至るまで版を重ねていることが確認できるものの、博文館からの新著の刊行は1901年の『出世の葉』以後途絶えており、鷗外との邂逅に至るまで渋江は博文館への著述活動のみで生計をたてていたわけではない。

渋江自身が、抽斎伝ではなく保伝になってしまつてはと配慮したこともあって、鷗外のために書き下ろした資料中に見られる、後半生についての記録は、ごく簡単ものであり、1890年以降の渋江の活動についての情報は、きわめて少ない。そのため不明瞭な部分が多いものの、博文館からの著作刊行が途切れた後、渋江は大学館という出版社から羽化仙史ほかの筆名で冒険小説を大量に書き下ろし、続いて催眠術書を立て続けに刊行したことが知られる。

明治末年に至って執筆活動は中断される。そして、大正時代に入って、渋江は山路愛山（1864～1917）の助力を得て訳読会を組織し一種の私塾の講師として活動する。

鷗外との出会いの後は、『澀江抽斎』、『伊沢蘭軒』さらには書かれざる『松崎慊堂』の資料収集を担い、鷗外のための取材記者的な役回りも果たしていた。

先に引いた『伊沢蘭軒』（その90）の一件は次のように局を結ぶ。

「わたくしは前に再び池田氏の事を説いた時、疑を存して置いた。後渋江保さんは上野図書館を訪ふ序に、わたくしのために禅利記を閲してくれた。錦橋の墓誌は収められてゐて、京水のものは収められてゐなかつたのである。」（その219）

晩年は神誠館や上村売剣（1866～1946）の援助を得て易学の著述に打ち込み、1930年に長逝した。

2. 国会図書館所蔵の抽斎旧蔵書

渋江抽斎（1805～1858）の蔵書印を確認できた資料を以下に掲げる。掲出したもの以外にも国会図書館蔵書中に渋江抽斎旧蔵書が含まれる可能性はあるが、これらが現在までに確認できているものである。

後昔物語 写 1冊 24cm

東京図書館（1880-1897）蔵

<請求記号：197－248>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記，榊原家蔵，故榊原芳埜納本

識語：右喜三二随筆後昔物語一卷借好問堂藏本友人平伯民為予謄写庚子孟冬多一校 抽斎

1883年東京図書館へ寄贈された榊原芳野（1832～1881）旧蔵本。

本書に触れた文献に森銚三「後は昔物語雑考」があり、渋江→森枳園→榊原と持ち主を変えたものと推測されている。

魁本大字諸儒箋解古文眞宝 室町時代 刊 1冊 27cm

東京図書館（1880-1897）蔵

<請求記号：WA 6－64>

印記：養安院蔵書，養安，弘前医官渋江氏蔵書記，読杜艸堂，大沼，おふぬま，向黄邨珍蔵印

列子庸齋口義 南北朝時代 刊 2冊 26cm

東京図書館（1880-1897）蔵

<請求記号：WA 6－65>

印記：養安院蔵書，養安，正健珍藏，久遠院（下巻のみ），弘前医官渋江氏蔵書記

人間一生胸算用 京伝戯作自画 〔江戸：蔦屋重三郎〕〔1791（寛政3）〕 刊
1冊 18cm

1898年6月3日購求

<請求記号：207－268>

書名は書外題による 角書付書名：悪魂後編人間一生胸算用 版心書名：むなさん用，胸さんやう

印記：浮生亭，福田文庫，渋江氏珍玩

堪忍袋緒〆善玉 3巻 山東京伝作 〔北尾重政画〕〔江戸：蔦屋重三郎〕
〔1793（寛政5）〕 刊 1冊 18cm

1898年6月3日購求

<請求記号：207－295>

書名は書外題による 版心書名：かんにんふくろ，かんにん袋

印記：渋江氏珍玩，渋江蔵書，福田文庫，浮生亭

魂胆情深川 写 1冊 17cm

1898年12月6日購求

<請求記号：208－2>

印記：福田文庫, 渋江蔵書, 中川氏蔵

美地の蛎壳 蓬萊山人婦橋 江戸：多田屋利兵衛 1779（安永8）自序 刊
1冊 16cm

1898年12月6日購求

<請求記号：208－23>

印記：渋江蔵書, 中川氏蔵

青帰書屋儲蔵目録 平善 [渋江抽斎] 録 写 1冊 23cm

1901年10月23日購求

<請求記号：191－736>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記, 齋校定, 森氏

市野光彦蔵書目録であるが、その蔵書全てではなく抄出であろうといわれる。

千金方薬註 4巻 松岡典 平安：野田藤八 [ほか] 1778（安永7）刊 4冊
（合2冊）26cm

1901年10月23日購求

<請求記号：213－304>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記, 森氏, 文垣書屋 [ほか]

弘前軍符 井口栄春図 渋江抽斎校 写 1冊 27cm

1904年12月5日購求

<請求記号：237－221>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記, [ほか]

識語：右軍符一卷借桐淵真弥手抄本影写画図着色井口栄春為予抄写壬子仲秋下幹一校訖功 同
月廿八日以異本校比加緒筆包打善 [印]「[判読不能]」, 「渋江氏平姓六世医師全善道純」

江戸鑑図目録 [渋江抽斎編] 写 1冊 24cm

1904年12月22日購求

<請求記号：237－238>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記

鵬外がこの書によって、弘前医官渋江氏が抽斎ではないかと推測するに至ったと記していることで知られる。内容は「西山堂筆記所載江戸鑑目録」、[7丁の影写]、「抽斎蔵書目録武鑑部」、[江戸図目録・江戸関係書目録]に別れている。影写の末尾に識語「右七葉命兎恒善謄写庚子仲秋六柳居主人」[印]「渋江全善道純」あり。

大力女 刊 1冊 19cm

1905年5月5日購求
印記:渋江蔵書 [ほか]

<請求記号:ろ-75>

塩屋文正物語 刊 1冊 19cm

1905年5月5日購求
印記:渋江蔵書 [ほか]

<請求記号:ろ-76>

源平軍論 刊 1冊 18cm

1905年5月5日購求
印記:渋江蔵書 [ほか]

<請求記号:ろ-77>

山家義苑 1238 (嘉熙戊戌) 刊 1冊 25cm

1907年3月30日購求

<請求記号:WA 35-4>

印記:養安院蔵書,指月亭蔵,弘前医官渋江氏蔵書記,向黄邨珍藏印

本書に触れた文献に長沢規矩也「宋刊本展覧会陳列書解説」がある。

五十三次江戸土産 馬蘭亭一賀 1782 (天明2) 刊 1冊 11×16cm

1909年11月11日購求
印記:渋江蔵書

<請求記号:198-362>

落話中興来由 式亭三馬 1815 (文化12) 序 写 1冊

1918年3月25日購求

<請求記号:WA 19-16>

印記:渋江蔵書,蔵書之印,京の□兵衛,花月文庫

本書に触れた文献に大沼宜規「稀本あれこれ (398)」がある。

みの虫考 屋代弘賢 写 1冊 27cm 松虫鈴虫考・松虫鈴虫の名の弁と合1冊

1923年7月16日購求

<請求記号:831-109>

印記:陽春蘆記,弘前医官渋江氏蔵書記

権量撥乱 山田正珍 東都:西村源六 [ほか] 1783 (天明3) 刊 1冊 23cm

1933年8月10日寄贈

<請求記号:838-105>

印記:弘前医官渋江氏蔵書記,根岸信輔氏寄贈 [冑山文庫]

度量衡説統 6巻 最上徳内 東都:須原屋新兵衛 [ほか] 1804 (文化元) 刊

3冊 27cm

1933年8月10日寄贈

<請求記号：839－45>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記,根岸信輔氏寄贈 [冑山文庫]

珍貨孔方鑑 中谷顧山編 大坂：富士屋長兵衛 [ほか] 1729 (享保14) 跋
刊 1冊 23cm

1934年4月16日寄贈

<請求記号：842－30>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記,森氏,根岸信輔氏寄贈 [冑山文庫]

永禄至宝永御国許日記 渋江抽斎編 1844 (天保15) 写 1冊 24cm

1934年8月21日購求

<請求記号：本別4－19>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記

識語：天保十五年十月十四日鈔写校読了 六柳平全善 [印]「勤」

本書に触れた文献に『国立国会図書館所蔵自筆本・書入本目録稿』がある。

本草序 写 1冊 29cm

1942年10月5日購求

<請求記号：特1－3307>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記,森氏,問津館,白井氏蔵書 [ほか] 白井文庫

俳優卅二相 東子樵客著 歌川豊国画 江都：耕書堂 [ほか] 1802 (享和2)
刊 1冊 19cm 角書：三戯場 彩色刷

1945年3月24日購入

<請求記号：855－9>

印記：渋江氏珍玩 [ほか]

樗園偶筆 杉本樗園 写 1冊 24cm

1947年6月16日購入

<請求記号：854－163>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記,森氏

本草図彙 写 1冊 27cm

1955年1月19日受入

<請求記号：わ499－12>

印記：弘前医官渋江氏蔵書記,大同薬室図書之記,書賈浅妻屋珍藏図書記

本来は別の形であったものをばらして現在の冊子の上に貼りつけている。

関難間記 2巻 写 1冊 25cm

1980年8月19日受入

<請求記号：W 221 - 52 >

印記：渋江蔵書、酒竹文庫、竹清印記

酒竹文庫の印は大野洒竹⁽³⁾の旧蔵であったことを示しているが、これは大野旧蔵本として売るために古書肆あった時に押されたもので、生前に使われた印記ではない。

万国幟旗図説 コルネーリス・ケレベル著 榎林恭助〔訳〕村片周覧 1846
(弘化3) 写 1冊 27cm 書外題：外夷徽章図

1980年9月9日受入

<請求記号：W 335 - 34 >

印記：弘前医官渋江氏蔵書記、籙斎校定

識語：右異国幟記一冊借抄于大石良臣如其図様則友人村片周覧為予抄模写目錄兎恒善手抄原本次序從尾横列至首且図様形小今改写以便展覽丙午夏日抽斎老人〔印〕「天宇」,「勤」,「抽斎」,「渋江全善道純」

一切経音義 慧琳撰 1737(元文2) 序 刊 50冊 28cm

1994年9月21日受入

<請求記号：W 781 - N 3 >

印記：弘前医官渋江氏蔵書記、森氏開万冊府之記、教育博物館印 明治十年八月廿二日交付

欽定周官義疏 卷第45～48 写 1冊 23cm

1999年8月25日受入

<請求記号：W 521 - N 1 >

印記：弘前医官渋江氏蔵書記、森氏、問津館、特許局図書印

3. 明治30年代帝国図書館へ入った渋江家蔵書

三田村鳶魚の編纂した『未刊随筆百種』に飛蝶「芸界きくまゝの記」なる書物が翻刻されている。初刊時の解題では著者について不明であるとされていたが、森銑三が書を寄せて以下のように指摘した。

「御校刊の未刊随筆百種第十に収録されました芸界きくまゝの記の筆者飛蝶のことがおわかりにならなかつたやうですが、飛蝶は経籍訪古誌の編著者の一人渋江抽斎の第二子で、十七の歳に矢鳥家を嗣いだ矢鳥優善、後に名を優と改めた人です。……「…大正五年に珍書刊行会で公にした劇界珍話は飛蝶の名が署してあるが、優の未定稿である」鷗外博士はかう記されてゐます。珍書刊行会叢書中の劇界珍話はとうに御承知のことと存じますが、同書も芸界きくまゝの記も、共に写本が帝国図書館に入つてゐます、その外同館には、右二書と同じ体裁で記されてゐる優の史界奇聞五冊などいふもあります、巻頭にはこれに

も「松川飛蝶山人編」とあり、緒言には、演劇相撲等に関することは多く芸界奇聞にゆづるとあります、してみると優の著書にはなほ芸界奇聞といふものもあつたと見えます、」(4)。

森の指摘する矢島優善の著書3点は以下のものである。なお細目については本文を優先したが、本文にはっきりした見出しがないもの等、適宜目次の記述を使用して情報を補っている。

芸界きくまゝの記 飛蝶筆記 写 2冊 26cm

1905年5月5日購求

<請求記号：231－82>

1. 目次/本書所拠/[1] 松本幸四郎の事/[2] 瀬川菊之丞の事/[3] 浄瑠璃の事/[4] 美男の聞え高き馬士 関東の小六 嵐雛助/[5] 助六所縁江戸桜/[6] 猿若勘三郎が中村勘三郎と改めし由来 二代目勘三郎が明石勘三郎となへしわけ/[7] 女形のはじめ/[8] むかしの雷電
2. 続稿 目次/[1] いかがはしき芸道/[2] 若くして出家したる俳優/[3] 河原崎三升のしばらく/[4] やきもち やきもち焼/[5] 劇場の沿革/[6] 阿波の四天王 鬼面山 大鳴門 陣幕 小野川/[7] 生月鯨太左衛門 舞鶴 鬼若 皆瀬川/[8] 名人小団次
翻刻『未刊随筆百種 第5巻』中央公論社,1977年/『未刊随筆百種 第十』米山堂,1926年所載

劇界珍話 飛蝶 写 1冊 26cm

1905年5月24日購求

<請求記号：231－96>

- 目次/1 紀州姫君の御観劇 珍事出来/2 松本幸四郎の義侠/3 市川家代々の歌/4 名優の年齢/5 俳優の給金/6 市川団之助の自殺/7 小野川喜三郎と市川門之助 阿武松緑之助と中村芝翫/8 力士界の陣幕久五郎と演劇界の仁王仁太夫 附陣幕驚々浜の成績表/9 年齢のつりあひ 助高屋高助の事 市川小団次の事/10 初しばらく 元祖団十郎の事 二代目以下当代までの団十郎の事/11 沢村田之助
翻刻『珍書刊行会叢書 第九冊』珍書刊行会,1916年所載

史界奇聞 写 5冊 26cm

1905年5月5日購求

<請求記号：231－64>

1. 一の巻 松川飛鳥山人編 緒言/目次/[1] 新見家伝来おぼえがき概梗/[2] 楠公戦死の事/[3] 仁徳天皇/[4] 伝教受灌頂於弘法/[5] 六観音本説/[6] 詠張子房 大田錦城/[7] 日本史不立神功紀/[8] 伊弉諾又伊邪那岐伊弉冊又伊邪那美以前の神々/[9] 齋魯優劣の弁/[10] 太平記/[11] ?/[12] 春日局/[13] 御位争/[14] 子夏之勇/[15] ?/[16] 明堂/[17] 当世見立三幅対 安政四年丁巳 抽斎/[18] ハルリスの哥 抽斎/[19] 米使謁見/[20] 日米条約/[21] 米船初めて渡来せし際の大相撲番附并に勝負附/[22] 陣幕が小柳に負けたる際の番附并に勝負附

2. 二の巻 目次/ [1] 内裏炎上/ [2] 古代内裏炎上/ [3] 内裏炎上近例/ [4] 豊太閤/ [5] 禁裏女中名/ [6] 式亭三馬/ [7] 入墨/ [8] 稀有の大雷/ [9] 嘉永雜録 [目録] 二の巻乙 [10] 清人某の所見 同塵/ [11] 津輕家略譜 抽斎撰 同塵補
3. 三の巻 [統篇] 同塵市隱輯 目次/ [1] 医学館に於ける陪臣町医講書沿革/ [2] 寛保三年江戸の戸籍人口/ [3] 道三湯/ [4] ござんすまい/ [5] 女郎二幅対/ [6] 似た物づくし / [7] 明和二乙酉年の哥/ [8] 明和年代の女郎身請金/ [9] ? [目録] / [10] 晝詞/ [11] 輟耕録/ [12] ? / [13] 賀詞/ [14] 旧幕府外戚考
4. [二の巻の続き] [1] 八十歳以上の役人/ [2] 生島新五郎百十九歳/ [3] 力士、力持をなして米人を驚かす/ [4] 俳優の鶏姦 男色の流行/ [5] 世事見聞録/ [6] ? / [7] 保元平治の乱 岡本保孝著/ [8] 歴代人物評錦城 岡本保孝/ [9] 女の髪/ [10] 国喪私議 室鳩巢 (巻末に「二の巻大尾」とあり)
5. [三の巻の続き] [1] 本朝古代の経学と唐代の学制との関係 島田重礼/ [2] 柳亭筆記目次/ [3] 詩に古今の別あること/ [4] [詩経講義筆録] / [5] 孫子要略 東條一堂講/ [6] 三婦考 大田錦城 島田篁村

『史界奇聞』は後半の巻では目次と内容との間に齟齬があり、明らかに本文とは無関係の丁が混在している。この写本は、雑多な筆録を綴ったもので、目次は内容の見出しとして後から付された可能性が高く、目次と無関係に見える丁は、項目を立てることの出来なかった部分とも考えられるが、明らかに中断している項目も含まれている。「三の巻」以降が同塵市隱輯の統篇となっているが、一、二巻にも同塵と署名のある一条が含まれている。

同塵市隱が矢島優善の別筆名であれば問題はないが、同じ署名を持つ『劇界雑話』の内容は渋江保の著作であることを示している⁽⁵⁾。また、渋江自身が鷗外に提供した資料中で自著として挙げたものの中に同塵市隱名義で刊行されたものが2冊ある。

『史界奇聞』の緒言には、「ただし演劇相撲等に関すること多く芸海奇聞にゆづりてこゝにのせず」とあり、森のいう『芸海奇聞』は『芸海奇聞』が正しい。この『芸海奇聞』は西尾市岩瀬文庫に伝存しており、著者として挙げられているのは同塵市隱である⁽⁶⁾。

そこから、以上の写本を矢島優善の著作と見ることに間違いはないにせよ、森が明言を避けているとおり、自筆か否かは確定が困難であり、過半は渋江保によって筆写されたものと見るのが正しいと思われる。そして、『史界奇聞』は、おそらく矢島が書き残したものを核に、保が編纂をこころみた書であろう。

矢島関連本と見られるものは、ほかに以下の3点がある。

豊介劇話 豊介子談話 飛鳥山人筆記 写 1冊 26cm

1905年3月31日購求

<請求記号：228－207>

目録/1眼鏡連 一名周茂叔連/2七代目の蓮生坊 寿阿老人/3小団次とゆで玉子/4高鳥屋の
当り狂言/5船遊亭扇橋/6尾上菊次郎/7沢村田之助/8坂彦親子と太功記/9成駒屋の人気/10
船弁慶/11時雨西行/12江戸御構/13永機三津五郎と五代目路考 真剣の草履打/14ヨヒ三ツ
と歌右衛門/15源之助と茱萱 附鶯塚/16年代略記/附録 九代目三升の初しばらく附つらね

遊戯雑纂 牛鳥山房主人 写 1冊 26cm

1905年6月5日購求

<請求記号：231－147>

目次/[1] 総角の事/[2] 心中の事/[3] 三座以下創立の年/[4] 名優年齢/[5] 市川小団
次の大当り狂言/[6] 幡随院長兵衛と水野十郎左衛門/[7] 万延庚申年より満二十年間の相
撲番附/[8] 市村座代々の座主/[9] 上村吉弥/[10] 元祖市村才牛/[11] 六十一年を隔
て、の相撲番附并勝負附/[12] 中村歌衛門

相撲俳優見立花くらべ 飛蝶粹士 写 2冊 26cm

1905年6月5日購求

<請求記号：231－148>

1. 目次/[1] 安政三年丙辰春の世界震災後の新世界花くらべ/[2] 市川海老蔵/[3] 浮世
見立三幅対/[4] 阿武松、稲妻の優劣 其地位 其勝負/[5] 役者一口評 慶応元年乙丑春
/[6] 当時の〔役者〕番附/[7] 当時の相撲番附/[8] 三座家の狂言/[9] 三芝居板元/
[10] 浄瑠璃板元/[11] 浄瑠璃雑考/[12] 二人片岡仁左衛門/[13] 役者の〔年齢〕十二支
ぞろひ/[14] 浦島太郎 演劇の好材料 [附] 浦島子伝/[15] 故人狂言作者の大略/[16]
中古名人立もの俳号/[17] 当時に中絶名目/[18] 大立試合立廻り名目/[19] [昔の女形 右
近源左衛門] / [20] 立后奇談 しばいに仕組むべし/[21] 題春霄秘戯図後 前者の参考
2. 遊芸花くらべ 続稿 牛鳥山人 目次/[1] 市川家代々/[2] 初代瀬川菊之丞の辞世
并にたしなみのうた/[3] 初代松本米三郎/[4] 競争競進/[5] 文化十二年役者給金附/
[6] 天保八丁酉年評判記 江戸の部 京大坂の部

そして渋江保の書と目されるのが以下のものである。

劇界雑話 同塵市隠 写 1冊 26cm

1905年3月31日購求

<請求記号：228－206>

目録/1民谷伊右衛門の扮装/2笑い政岡、泣き仁木/3団十郎菊五郎の仲直り 坂彦の仲裁/4
長十郎と和三郎 万歳と才蔵/5団十郎の盛衰 熊谷ハ名誉のいとぐち/6成駒屋の為人/7出
る度毎に殺される/8田之助の当り狂言/9今一つ田之助のはなし/10家橋今の菊五郎の当り狂
言/11九蔵の親孝行/12九蔵の売出し/13市川左団次/14神童のなれのはて/15坂東新三郎/16
小文次の文弥とドモ又/17当時の花形/18当時の評判記/19給金附

以上の写本は、全てほぼ26cm × 18.5cmの大きさで、きわめて類似した渋引きの保護表紙が付けられている。これは西尾市岩瀬文庫に伝わる関連書も同様である。渋江家から出た時点でこの形であったかどうかについては、確定できないが、帝国図書館で付された表紙でないことは間違いない。ここから形態によって渋江家本を特定できる可能性が生じる。そこで、既出資料の前後に排架されているものを確認し、同じ渋引きの保護表紙を付された写本および関連書をリストアップし、受入日順に以下にその全体を示す。(ゴチックは本稿で言及したもの)

請求記号	受入日	タイトル等
(1) 237-67	明治三六年一二月五日購求	壺すみ礼 黒河春村 1冊
(2) 237-137	明治三七年一〇月一〇日購求	筆のまにまに 寿阿彌翁著 2冊
(3) 237-138	明治三七年一〇月一〇日購求	劇神傳話 1冊
(4) 237-139	明治三七年一〇月一〇日購求	秀鶴草子 1冊
(5) 237-152	明治三七年一〇月一〇日購求	ひめはし免 斎藤彦磨 1冊
(6) 237-168	明治三七年一〇月一〇日購求	錦城茶話 錦城大田元貞才佐著 2冊
(7) 237-171	明治三七年一〇月一四日購求	卓説集覽 4冊
(8) 237-172	明治三七年一〇月一四日購求	江戸風俗志料 松涛庵 14冊
(9) 237-173	明治三七年一〇月一四日購求	筆蹟流儀景図 古筆了伴 1冊
(10) 237-180	明治三七年一〇月一四日購求	五倫ノ弁 [島田重礼講義] 渋江保筆記 1冊
(11) 237-221	明治三七年一二月五日購求	★弘前軍符 井口栄春図渋江抽斎校 1冊
(12) 237-222	明治三七年一二月五日購求	諸家紋来由記 1冊
(13) 237-234	明治三七年一二月二日購求	今齊譜 古賀侗庵 合3冊
(14) 237-238	明治三七年一二月二日購求	★江戸鑑図目録 [渋江抽斎編] 1冊
(15) 237-247	明治三八年一月二四日購求	韓非子釈義 帆足万里 17冊
(16) 237-249	明治三八年一月二四日購求	伯夷列伝欄外書 根本通明 1冊
(17) 237-250	明治三八年一月二四日購求	新撰字鏡分音 狩谷椽斎 1冊
(18) 237-251	明治三八年一月二四日購求	長恨歌琵琶行攷異及略解 岡本保孝著 1冊
(19) 237-252	明治三八年一月二四日購求	●国学復古派系統 岡本保孝著 1冊
(20) 237-260	明治三八年一月二四日購求	茂睡考 山東京山 1冊
(21) 237-262	明治三八年一月二四日購求	●春秋内外伝之八考 朝川鼎学 1冊
(22) 237-289	明治三八年二月二日購求	続青年年表 五車書楼主人 1冊
(23) 237-290	明治三八年二月二日購求	算話拾沢集 1冊
(24) 237-291	明治三八年二月二日購求	告朔新説 東條一堂講義渋江恒善筆記 1冊

- (25) 228—205 明治三八年三月三日購求 三芝居楽屋雑書 八橋主人著 1冊
 (26) 228—206 明治三八年三月三日購求 劇界雑話 同塵市隠 1冊
 (27) 228—207 明治三八年三月三日購求 豊介劇話 豊介子談話 飛鳥山人筆記
 1冊
 (28) 231—64 明治三八年五月五日購求 史界奇聞 松川飛鳥山人編 5冊
 (29) 231—65 明治三八年五月五日購求 諸子撮要 2冊
 (30) 231—69 明治三八年五月五日購求 旧刊書目 老泉門人保人編 1冊
 (31) 231—82 明治三八年五月五日購求 芸界きくままの記 飛蝶筆記 2冊
 (32) 231—92 明治三八年五月二四日購求 三座狂言名題年表 3冊
 (33) 231—93 明治三八年五月二四日購求 歌舞妓のいろいろ 天保堂 1冊
 (34) 231—94 明治三八年五月二四日購求 芝居雑記 天保堂主人 1冊
 (35) 231—96 明治三八年五月二四日購求 劇界珍話 飛蝶 1冊
 (36) 231—146 明治三八年六月五日購求 下谷通志 山崎美成 1冊
 (37) 231—147 明治三八年六月五日購求〔台帳より〕
 遊戯雑纂 牛鳥山房主人 1冊
 (38) 231—148 明治三八年六月五日購求 相撲俳優見立花くらべ飛蝶粹士 2冊
 (39) 231—149 明治三八年六月五日購求 猿若町移転以前 芝居名題年表 1冊
 (40) 232—250 明治三九年二月二七日購求 飛鳥川 2冊
 (41) 231—221 明治三九年五月一五日購求 江戸鑑四種 1冊

★体裁の異なる同時期に収蔵された渋江抽斎旧蔵本

●体裁は異なるものの渋江家関連本と推測される写本

演劇関連では、まず以下の3点が無署名ではあるものの、筆跡などから渋江家に関連するものと推察される（以降判型の記述は略す）。

三芝居楽屋雑書 八橋主人 写 1冊

1905年3月31日購求

＜請求記号：228—205＞

目録/ [1] 三芝居年中行事/ [2] 稽古次第/ [3] 年代記/ [4] 大道具荒増/ [5] 小道具荒増 / [6] 蔵衣装荒増/ [7] 古来囃子外座附名目大略書/ [8] 大太鼓/ [9] 笛/ [10] 小鼓/ [11] 大鼓/ [12] 小太鼓/ [13] 唄/ [14] 三味線/ [15] 中古達人 唄三味線囃子方名目/ [16] 長唄/ [17] 三弦/ [18] 笛/ [19] 小鼓/ [20] 大鼓/ [21] 太鼓/ [22] 振付/ [23] 故人狂言作者の分大略/ [24] 中古名人立もの俳号/ [25] 当時に絶名目/ [26] 大立試合立廻り名目/ [27] 三座家の狂言/ [28] 同休座の分 附/ [29] 古今当狂言年数 天保六年まで/ [30] 三芝居板元/ [31] 浄瑠璃板元/ [32] 木戸/ [33] 火縄/ [34] 土間/ [35] 金元/ [36] 水船 / [37] 大入釣看板の略/ [38] 大太鼓/ [39] 第一番目/ [40] 第二番目/ [41] 打出し

三座狂言名題年表 写 3冊

1905年5月24日購求

<請求記号：231－92>

1. [1] 上の巻 中村座の部 (天保十三年～嘉永四年) / [2] 中の巻 市村座の部 (天保十三年～嘉永四年)
2. 戲場名題年表後篇 [1] 上の巻 中村座の部 (嘉永五年～安政二年) / [2] 中の巻 市村座の部 (嘉永五四年～安政二年) / [3] 下の巻 河原崎森田後に守田両座の部 (天保十四年?～嘉永四年) / [4] ? / [5] 附録 丑旦表
3. 戲場名題年表続稿 [1] 上の巻 中村座の部 (安政三年～慶応三年) / [2] 中の巻 市村座の部 (安政三年～慶応三年) / [3] 下の巻 森田座の部 (安政三年～慶応三年)

猿若町移転以前 芝居名題年表 写 1冊

1905年6月5日購求

<請求記号：231－149>

- [1] 上の巻 中村座の部 (天保元年～八年) / [2] 下の巻 河原崎座の部 (天保元年～八年) / [3] 天保八年役者位附 / [4] 三座 座がしら立小山表

『三芝居楽屋雑書』には「明治二二年三月三〇日交換」という印のある別本(請求記号：147－119)がある。こちらは巻末に渋江家本に欠けている「〇三芝居三階中二階惣楽屋の図」を収めており、原本もしくは渋江家本よりも遡る写本と考えられる。

そして矢島関連本とした『相撲俳優見立花くらべ』の一部は、この『三芝居楽屋雑書』を写したものである。また、以下の書の大半も同書を写したものであった。

歌舞妓のいろいろ 天保堂 写 1冊

1905年5月24日購求

<請求記号：231－93>

- 目次 / [1] 大当たり狂言 / [2] 大道具荒増 / [3] 小道具荒増 / [4] 蔵衣装荒増 / [5] 宝永千載記 / [6] 題春宵秘戯図後 / [7] 古来囃子外座附名目大略 / [8] 大太鼓 / [9] 笛 / [10] 小鼓 / [11] 太鼓 / [12] 小太鼓 / [13] 唄 / [14] 三味線 / [15] 中古達人 唄三絃囃子方名目 / [16] 長唄 / [17] 三絃 / [18] 笛 / [19] 小鼓 / [20] 大鼓 / [21] 太鼓 / [22] 振附 / [23] 市村宇左衛門 / [24] 権八の人相書 / [25] 愛妾龍田

芝居雑記 天保堂主人 写 1冊

1905年5月24日購求

<請求記号：231－94>

- 目次 / [1] 芝居雑記〔梗概〕 / [2] 芝居年代記 / [3] 芝居年中行事

さらに、森銑三の前記の文には「…帝国図書館所蔵の劇神仙話などいふ書は、

写しは違つてゐますが、巻中に「抽斎云」などとした朱書があり、渋江家で成つた本だといふことが知れます、…」とありこれが指すのは以下の書であろう。

劇神僊話 写 1冊

1904年10月10日購求

〈請求記号：237－138〉

巻首書名：劇神仙話

劇神仙関連書はさらに2点あり、これら一連の書物に関しては鹿倉秀典による研究⁽⁷⁾があり、『劇神僊話』については伊原青々園の手による写本が早稲田演劇博物館に蔵されており、「弘前医官渋江氏蔵書記」の印記も写されているという⁽⁸⁾。

鹿倉は『劇神僊話』翻刻に付した解題で、お茶の水図書館蔵の抽斎自筆稿本『僊話』などの筆跡とほぼ一致することから国会本は、渋江抽斎による写本ではないかとするが、これは森が「写しは違つてゐますが」と記したように抽斎の筆とは異なるように思われる。

秀鶴草子 写 1冊

1904年10月10日購求

〈請求記号：237－139〉

識語：此一則及書中上方所記並劇神仙翁所録也壬寅冬日借梅屋主人蔵本手抄并記翁説如此如予有説以朱筆別之抽斎主人

筆のまにまに 寿阿彌翁著 写 2冊

1904年10月10日購求

〈請求記号：237－137〉

1. 上の巻 目録/ [1] 清少納言の墓/ [2] 海人/ [3] 男女交合して離れざる見せ物/ [4] 雑事秘辛/ [5] 題春霄秘戯図後/ [6] 戯婦之法/ [7] 八十一万歳/ [8] 禍双/ [9] 歌舞妓狂言座/ [10] 吉原遊女町/ [11] 漢長楽宮の瓦/ [12] 市俊卿先生賛/ [13] 酔堂記/ [14] 源語の作者/ [15] 酒のはなし/ [16] 神君御子様方御出生干支表/ [17] 源語抄ともの名/ [18] 虹蜺/ [19] 康熙帝の比喩/ [20] 宋本闕筆/ [21] 瀧橋橋/ [22] 当意即妙/ [23] 氏なふて玉の輿/ [24] オロシヤ人の謡/ [25] 堀杏庵愛五柳先生/ [26] 御用金請取書/ [27] 読書指南序/ [28] 屯蒙/ [29] 象の形体/ [30] 蛮図畜象如中国牛馬/ [31] 象の胆并鼻端の爪/ [32] 象の交合并生子/ [33] 牡象領牝者三十余/ [34] 女髮繫大象/ [35] 象肉/ [36] 象牙/ [37] 象の性馴れ易し/ [38] 象の懼れ悪むもの/ [39] 西行法師人丸に値ふ事/ [40] 浦島子伝/ [41] 天明四年の飢饉/ [42] 鐘馗詩

2. 下の巻 目録/ [1] 御当家御外戚/ [2] 女中の堯舜/ [3] 学問所御吟味/ [4] 伊弉諾伊弉冉二神の生ミ給へる御子たち/ [5] 南畝受験の詩/ [6] 怪婦録/ [7] 切支丹訴人御褒美

可被下との高札/ [8] 三等の神/ [9] 中風の妙薬

一部『相撲俳優見立花くらべ』に見える項目が立っている。

以下演劇関係以外で、洪江家に関わることが明らかなものを紹介する。

告朔新説 東條一堂講義 洪江恒善筆記 写 1冊

1905年2月21日購求

<請求記号：237－291>

識語として「右『告朔新説』ハ東條一堂翁ノ講義ヲ亡兄ガ筆記シ置キタルモノナリ…羽化仙史しるす」とある。ただし洪江抽斎の長男洪江恒善（1826～1854）によるオリジナルの筆記ではなく羽化仙史＝洪江保による転写本と思われる。

諸子撮要 2冊

1905年5月5日購求

<請求記号：231－65>

1. [1] 卷之一 孫子撮要 錦城先生述 門人洪江権六筆記/ [2] [識語 洪江保か?]/ [3] 孫子撮要附録 錦城述/ [4] 卷之二 韓非子撮要/ [5] 説難纂訳 同塵/ [6] 附記
2. [1] 老子論 抽斎/ [2] 老子撮要/ [3] 附録

錦城茶話 錦城大田元貞才佐著 写 2冊

1904年10月10日購求

<請求記号：237－168>

1. 上 [1] 身力に不応之事/ [2] 食後睡眠/ [3] 素心先生墓之事/ [4] 好事不如無之事/ [5] 眉間白毫之事/ [6] 蝦夷地方之事/ [7] 弓鉄炮之事/ [8] 殺生石之事/ [9] 天地之事/ [10] 山田春城之事/ [11] 陰陽之事/ [12] 什物之事/ [13] 岡西宗貞之事/ [14] 虚誉の事 附小松重盛の事/ [15] 神代杉之事/ [16] 六指を治す法の事/ [17] ちくら/ [18] 射術/ [19] くはず貧楽/ [20] 古代の石/ [21] 造石の法/ [22] 油煙松煙/ [23] 五分五分の辞/ [24] 人性/ [25] 性善/ [26] 大塔宮/ [27] 板行書籍/ [28] 遺恨/ [29] 掘出し/ [30] 唐土人情/ [31] わらの上/ [32] ひらだいかた/ [33] 馬をせむる/ [34] 年を経て花の鏡との歌/ [35] 穀蠹/ [36] 荻生茂郷/ [37] 和歌/ [38] やまとの訓
2. 下 [1] 奉公を構ふ/ [2] 一休和尚/ [3] 木綿/ [4] 和歌/ [5] 人欲の事/ [6] 和名の事/ [7] 夜宴に燈に油を加ふる説/ [8] 裘之事/ [9] 学問をすれば貧になるといふ事/ [10] 雷の事并天狗の説/ [11] 水滸伝之事/ [12] 酒の趣向之事/ [13] 梨も礫も打ぬといふ事/ [14] 川越合戦の事/ [15] 櫛/ [識語]

識語に「此の書は去る明治十二年予が御成町の露店にて買入たるものにて或は錦城茶話とも題し又は之を塗抹して白面囃語ともしるしありおもふに白面囃語といふは何者かのたはむれに附けたるものにて錦城茶話の方ただしかるべし表題はかくのごとくあやしけれども内容は正しく錦城翁の筆にしてしかも予か他に蔵する茗会文談中にのせたとおなじきものおほしいつれにしても翁の真作にそうみなきなり 筆者しるす」とある。ただし本書は錦城によ

るオリジナルの筆記ではなく転写本であり、おそらく渋江保によって成ったものと思われる。

卓説集覽 写 4冊

1904年11月14日購求

<請求記号：237-171>

1. 卷之上 [1] 浩然之氣章 大田元貞錦城/ [2] 主道韓非子 太田方叔亀/ [3] 講義壹東 太田覃南畝/ [4] 厥論 丹波元簡桂山/ [5] 駱駝放 渋江全善抽斎
2. [1] 毛詩關雎篇 海保元備漁村/ [2] 注解二種 岡本保孝 [長恨歌攷異及略解・琵琶行攷異及略解] / [3] まなびのをしへ 市野光彦迷庵/ [4] たはれごと 渋江全善抽斎
3. 卷之下 [1] 註解 狩谷望之椽斎/ [2] 楊樞韓非子 太田方叔亀/ [3] 龍のはなし 大田元貞錦城/ [4] 講義 東條一堂/ [5] 主道韓非子 蒲坂円
4. [1] 趣意書 丹波元堅/ [2] 建言書 松崎復慊堂/ [3] 雜題 佐藤一斎/ [4] 修辭通 帆足万里/ [5] 易說 朝川鼎善庵

長恨歌琵琶行攷異及略解 岡本保孝著 写 1冊

1905年1月24日購求

<請求記号：237-251>

- [1] 長恨歌琵琶行攷異及略解上/ [2] 長恨歌琵琶行攷異及略解下/ [3] 附録 漢の呂后が千人の肌に触れたりとの説/ [4] [長恨歌講義筆記?] / [5] 長恨歌和文
- 『卓説集覽』所載のものと同じテキストが過半をしめる。後半に異なった筆跡によって記された部分がある。

国学復古派系統 岡本保孝著 写 1冊

1905年1月24日購求

<請求記号：237-252>

これは渋引きではなく栗皮色の保護表紙を付されているが、筆跡は『長恨歌琵琶行攷異及略解』の冒頭部分と同じである。

春秋内外伝之八考 朝川鼎学 写 1冊

1905年1月24日購求

<請求記号：237-262>

これも渋引きではなく栗皮色の保護表紙を付されているが、筆跡から渋江保による写本と推定される。

五倫ノ弁 [島田重礼講義] 渋江保筆記 写 1冊

1904年11月14日購求

<請求記号：237-180>

巻首に「戊戌一月七日双桂精舎発会ノ節島田先生ノ演述セラレタルモノナリ 渋江保筆記」とあり。「渋江保筆記」の部分のみ通常の渋江の筆跡である。渋江家に複本が残されていたものか、この写本が参照されたものか不明であるが、この講義は大正年間、『興道』第5号(1919年7月15日)において渋江自身の手で活字化されている。

伯夷列伝欄外書 根本通明 写 1冊

1905年1月24日購求

<請求記号：237－249>

[1] 伯夷列伝欄外書/ [2] 管晏列伝欄外書/ [3] 老荘申韓列伝欄外書/ [4] 伯夷伝評

この写本も様々な筆跡によって成っている。普通に見られる渋江保の筆跡とは異なるが、関連写本に見える筆跡である。

韓非子釈義 帆足万里 写 17冊

1905年1月24日購求

<請求記号：237－247>

大半が渋江保によって写されたと思われるが、様々な筆跡を含む。複数の写本の寄せ集めではなく、一つの原本を複数の手によって写したことが明らかであり、それぞれの筆跡の持主は、渋江家に関連する人物であると確定できる。

巻末に識語「弁 有客云、帝国図書館蔵帆足万里著韓非子釈義者。今茲、偶得借覽其書、大驚矣。與余韓非子注釈酷相似、而亦片言隻語不錯。仰此原本出帆門儒生、一日、渋江保君、求余手写之、以為一書。是即此書歟。以謂未可蔽為先生釈義者、往往有之。或門生意歟。益不可知也。恐玉石混合汚瀆学者体面施誤天下後生。仍贅一言、埃識者。明治三十有八年季冬井上友吉識 [印]」が付されている。

江戸鑑四種 写 1冊

1906年5月15日購求

<請求記号：231－221>

購入時期が離れ、筆跡も異なるが、先に述べた抽斎自筆の『江戸鑑図目録』をそのまま筆写したものである。

4. 渋江保の執筆活動（その1）

これらの稿本類の流出元はどこであったか、そして流出時期はいつごろであったと見るべきか。

年月の記述を含む稿本類で、最も年代の下るものは島田重礼塾における1898年の発会式の講義筆録『五倫ノ弁』である。また『史界奇聞』には巻頭の目録に見えない無関係な丁が紛れ込んでおり、その中に1899年の日付が付された詩経の講義筆記が含まれている。

また、出所を同じくすると思われる西尾市岩瀬文庫所蔵の写本の購入時期も帝国図書館のそれとほぼ同時期であったと推測される⁹⁾。

以上のことから、この一群の稿本は明治30年代半ばに、渋江保によって手放された可能性が高い。また、大正時代に森鷗外が抽斎の稿本類を渋江に示されていることから、この時点で手放されたのは、不用の反古と見なされたメモ

書きに近い稿本もしくは複本が中心であったと思われる。

渋江が、鷗外に提供した資料から1903年の部分を見てみよう。

「明治三十六年◎私ハ去る三十年に頭部に負傷して以来、ミづから性来の愚が益々愚になつたことを知り下手に世間に出て失敗せんよりハ「百事を捨て、専心研究に従事するの宿望を遂げん」と欲し、それハ先づ多少の金を得てその金利に衣食せねばならぬと思ひ、柄にない株の相場に手を出した、然るに意外にも僥倖にして八九万の金を得た 依て研学専門にならんとした 不幸にして此の年三名の恩人に義理を立て或る人々に頼まれて連帯の印を貼したために非常の悪結果を生し、折角の金を水泡に帰せしめたのみか 所有の動産不動産（書籍ハ此の外）を悉く売却せねばならぬ 爾來私ハなまなか知人と交際せんとして需索でも言ひ掛けハせぬかと疑はるゝを厭ひ 殆んど全く交際場裏に出ることを避け世間に忘れさられんとした」（「拙斎歿後」188頁）

渋江保が株で財をなした時期や、保証人となったがために財産を散じた具体的な時期は不明であるが、1904年に神田転居が記録されていることから、この転居のために、家蔵資料が処分されたと仮定できる。

1897年の事故について渋江は、

「◎此の年八月不慮の災難を受く 倅純吉の足を洗ひ遣はさんとて井戸端に出て既に洗ひ卒へて小児を抱へて立たんとせしに誤て窓の竹にて頭部の天辺を甚たく打ち 一事ハ殆んど人事不省となりたり 幸にして甚しきに至らざりしかど七八分凹ミタリ 神保院長鈴木篤三郎の話に今少して骨を折りたれば死を南無枯れ免かれざりしなりと 爾來好きな読書ニハ差支なけれど所謂「糊口の著訳」ハ当分殆んど為すに堪えざりき」（「拙斎歿後」187頁）と書く。

しかし、以下の記述からすれば深刻な障害を得たわけでは無いようである。

「◎私ハ多年周易と老子と素問との研究に興味を持つて居る 根本羽嶽の易に名あるを聞き 就て参考の一部に供せんと欲し、此の年九月東脩を納めて門下の一人に加はり日々その意見を叩く。」（同）

つまり事故の翌月から根本羽嶽の講義を受けており、著述活動の停滞について本人が前面に押し出した健康上の理由は、副次的な要因と見るべきだろう。新興出版社であった博文館は次第に発展を遂げ、その要求水準や方向性が、1897年に至って渋江の志向する著作活動と乖離しはじめていたとおぼしく、保は一種の挫折をこの時期に味わい、相場に走ったのではあるまいか。

ここから 1897 年までの渋江の著作活動を見て行く。

最初の著作は師範学校入学以前の 1872 年に遡る『米国史』(万卷楼)である。この書は英語を学びはじめて僅か 1 年にして成っている。8 月付の序を持つが、文中に「宿月晦」とあることから 3 月中に成稿したようだ。この『米国史』は G.P.Quackenbos の *Elementary history of the United States* を主に参照して著されたもので、異同も見受けられるが、章立ては基本的に同書を踏まえている。凡例に「此書ハ格賢勃斯氏ノ合衆国史ヲ主トシ旁ラ諸家ノ史籍ヲ搜索シ編輯セシ者ニシテ必ス一家ノ説ニ拘泥セス是レ其事實ニ謬誤アラントヲ恐レテナリ」とあり、逐語訳ではないため単純に原書と比較して渋江の英語力を判断することは難しい。稲田雅洋は、本書が成るにあたっては、拙齋五男で明治初年山田源吉の養子となった兄山田脩(専六)(1854～1908)の力が大きかったのではないかとする⁽¹⁰⁾。

稲田は荒木伊兵衛『日本英語学書志』に山田の著作が出ていることをその根拠とし、山田の英語の実力を評価している。しかし、同書に挙げられた書物は『版権准刻書目』から抽出されたものにすぎず、この書目には、実際に出版に至っていないものも含まれている。

『日本英語学書志』にはかなり誤植があるので、改めて『版権准刻書目』(文部省)から渋江・山田関連の書目を抽出すると以下ようになる⁽¹¹⁾。

「ウイルソン | リードル直訳 翻訳 山田専六 | 出板 渋江保 二冊
ウイルソン氏リードルへ御国字ヲ以テ音訳和訳ヲ附ク」

「米国史 翻訳 | 出板 渋江保 五冊

ウイリリアルト及ビクエツケンボス以下ノ諸米国史ヨリ撮訳ス」

(以上『准刻書目』壬申 [1872 年] 5 月)

「西洋雑話 著述 | 出板共 渋江保 三冊

西洋諸史及ビリードル等ヨリ抄訳シタル書ナリ」

「西洋イロハ字引 著述 山田専六 | 出板 渋江保 三冊

英語ヘイロハノ順序ヲ以テ分配和訳ヲ加フ」

「英学窺管 翻訳 山田専六 | 出板 渋江保 二冊

アレキサンドルゾムノリードル、ハ片仮名ヲ以テ音訳並和訳ヲ附ス」

(以上『准刻書目』壬申 [1872 年] 6 月)

これらを見れば決して山田の執筆活動が先行していたわけではなく、また梗概から判断すれば、山田の訳したものの質が保のそれを上回るものとは考えにくい。

さて、これらの書物は実際に刊行されたのか。太田勘右衛門編輯『戊辰以来新刻書目便覧 明治六年癸酉十一月官許』⁽¹²⁾の記述は以下のとおりである。

「米国史 初帙 渋江保 同 [五十銭] 二 [冊] 」(71頁)

「ウイソソ^マレ第一リートル直訳 山田専六 十匁 一 [冊]」(129頁)

ここから山田の1冊も出版されたものと考えられるが、現在のところ実物が確認できるのは渋江の『米国史』3巻4冊のみである。初帙として1巻、2巻の2冊が刊行され、引き続いて3巻の上下2冊が出たものと思われる。

8月21日には「米国史第五六篇出板」の相談が行われている（「拙斎歿後」174頁）が、国立公文書館に5組も同書が所蔵されているにもかかわらず、5冊目以降の所蔵がないことから、刊行は中断したとおぼしい。

1881年、宝飯中学赴任時の「履歴書」⁽¹³⁾は、英学について、尺振八の下で「五年壬申二月迄」、大学南校で「五年壬申三月マテ」修業としており、一端就学が途切れている。つまりこの『米国史』稿本は1年にも満たない就学の成果であった。

また、漢学についても田口文蔵の下で「五年壬申二月迄」、海保塾で「明治五年壬申四月マテ」修業としており、5月、6月の『准刻書目』に掲載された著作群は、この時期に渋江が学業を中断し、著述と出版によって世に出ることを目指していたことを示しているようにも見える。しかし、これは学費を工面することに主眼があったようで、新たに創立された官費で学ぶことができる師範学校に合格した渋江は、同年9月に入学し、さらに学業を続けていくことになる。

1875年師範学校を卒業した渋江は、浜松瞬養校に赴任し、同校のために『小学授業必携』『小学入門授業法』を執筆出版する。

1876年1月31日に刊行された『小学入門授業法』は授業で必要とされる各種の図、表をまとめたものでオリジナリティは見られず、仲新編『近代日本教科書授業法資料集成』に収められている土方幸勝編『師範学校 | 小学教授法』1873年8月のバリエーションと見て差し支えない。しかし、それに先行して巻1が1875年6月22日に、巻2が12月15日⁽¹⁴⁾に刊行された『小学授業必携』は、非常に興味深い書物となっている。

凡例で「一 此書は東京師範学校の教則に基き傍ら県下の民情を攷へ斟酌して編輯せしもの也」とし「一 習字時間は毎日三十分を以て定則となすと雖も僻邑に至りては或は習字を以て第一の急務と思ふものあり故に暫らく人心の向ふ所に従ひ増加して可なり」と地方の状況を勘案する一方で、徹底的に教育の

マニュアル化を押し進めた書物である。それぞれの授業について開始から何分に至るまではこれこれのことをなし、何分から何分にはこれこれのことをすべしと、懇切に授業の進め方を記した上、巻末には賞罰の基準、罰の軽重等が箇条書きされており、「瞬」時に師範を「養」成するという目的には絶大な効果を持つ書物であったであろう。

確言はできないが、こうした、ほぼ台本に近い教授法書というのは殆ど例がないと思われる。不慣れな教師がマニュアル頼りの授業を展開している可能性は高く、当時の具体的な日々の授業の模様をこの書から再現することもできよう。先に触れた『近代日本教科書授業法資料集成』には「明治期教授法関係図書目録」（第4巻、721-740頁）が収められているが、この目録に渋江の名はない。おそらく、渋江の書がこの集成に収められなかったのは、その存在が気づかれなかったためであろう。同書は学制期の小学校の授業を研究する上で、きわめて有用な素材であると思われる。

慶應義塾在学中に渋江は、山田要蔵とシェルドン・エイモスの『英国憲法論』を共訳した。出版された同書の標題紙には「明治十四年七月出版」とあり、小幡篤次郎の序文も「明治十四年七月下澣」と記され、刊行は卒業後となっているが、同書の奥付によれば1880年10月2日に版權免許を受けており、その緒言に「明治十三年八月」とあることから、この翻訳の仕事は、かなり早い時期からすすめられていたようである。

原著は *A primer of English constitution and government* by Sheldon Amos (3rd.ed)。同書は原著の60頁まで（General view of the constitution and government of England/The sovereign/The House of Lords/The House of Commons）を抄訳したもので、38頁までを上巻として渋江が、それ以降を下巻として山田要蔵が訳している。邦題は『英国憲法論』とされているが、取り上げられているのは英国における議会の姿と選挙制度の在り方であり、来るべき帝国議会創設へ向けての検討材料となるべき書物であった。

慶應義塾卒業の後、いくつかあった新聞記者の口を断り、愛知県の宝飯中学へ赴任した渋江は、投稿が評価されて『東京横浜毎日新聞』に接近して行き、遂には同紙の記者となる⁽¹⁵⁾。

同社を退隠し静岡へ移った渋江は『東海暁鐘新報』（のち『暁鐘新報』）の主筆に招かれ、憲法発布に際しては解説書の刊行を考えていたようである⁽¹⁶⁾。しかし、相次いで多数の憲法関連書が出版されていく中に割って入ることは困難であったとみえ、これは実現を見ていない。

Notes on Macaulay's Milton (共益商社書店) の奥付に記された発行日は、東京に移ってから執筆された博文館での最初の著作よりも後の7月26日になっている。しかし、緒言に「明治二十三年一月」と記されていることから、静岡時代に成ったことは間違いない。本書は国立国会図書館のほか京都産業大学にも所蔵があり、そちらには見返しに「マコーレー氏彌爾頓伝註釈 攻玉社蔵版」と記されている。音楽関係の出版物で知られる共益商社書店は白井練一の興した出版社で、斎藤恒太郎が訳注を手がけた *Notes on Macaulay's Lord Clive* も刊行していた。斎藤は、攻玉社における渋江の前任者であり、本書が執筆されるにあたって何らかの形で関与した可能性も考えられる。

1890年、静岡から東京に移り、3月3日有楽町の竹の舎に落ち着いたという渋江は、3月26日から博文館の著述に従事しはじめた。署名が確認できる最初の博文館での仕事は、『富国』4月号における論評「政治社会の流弊」である。引き続き5月にも同誌に「人物評の流行」を執筆、翌6月と7月には『日本之少年』に渋江の名が見える。

この7月、そして8、9月と立て続けに渋江の単行本が「博文館叢書」から刊行されて行く。

「博文館叢書」は1890年2月その第1回として『通俗学術演説』を刊行する⁽¹⁷⁾。そして、この叢書は雑多な啓蒙書のシリーズとして1892年頃まで続く。終刊は坪谷善四郎『博文館五十年史』によっても判然としないが、1892年3月の第26回『尋常小学教授法』が確認できた中では最終のものになる。後にこの叢書は1890年1月にスタートしていた「通俗教育全書」に事実上統合されて行き、「博文館叢書」から出された渋江の著作中『神童』以外の4点および、叢書から独立して刊行された3冊の文学史は、1893年に「通俗教育全書」として再刊されている。

渋江が博文館で最初に手がけた単行本は『通俗教育演説』である。博文館でのデビュー作に箔をつけるためであろうか、栗本鋤雲の題辞が巻頭におかれ、凡例には「明治二十三年五月 東都有楽町客舎に於て著者幸福散史識す」とある。同書の名は1890年6月15日発行の『富国』第11号の表紙に掲げられた「六月新版預告」に見える。しかし、この「預告」は、栗本鋤雲の題辞についてふれておらず、当初予定されていなかった栗本への題辞依頼が決定したために、刊行時期が遅れたものだろう。渋江は起稿から脱稿までの時間を「三句」としている。凡例にある5月が、何日を指しているのか不明であるが、3月末に博文館の仕事を始めたということから4月の1ヶ月で執筆されたとおぼし

い。なお、洪江は「抽斎の親戚並門人」(『森鷗外「洪江抽斎」基礎資料』,66頁)で栗本鋤雲に序文を請うた模様に触れている。

博文館側からのどのような依頼がなされたのか、また洪江がどれほど主体的に執筆プランを準備したのかは不明であるが、新しい時代に生きる指針を示す、処世訓、修養書に力点が置かれているように見える。

このことから、元『暁鐘新報』主筆というジャーナリストではなく、教育者としての洪江に博文館は価値を見出したのかもしれない。

8月刊行の『福の神』には高槻純之助の序が付されており、その中に西洋の稗史、小説が持つ民衆を鼓舞する力についての言及がある。後年、洪江が通俗小説を量産していることを思い起こさせるが、その創作において洪江は啓蒙にほとんど力を入れていないため、ここからの影響関係は無いと考えるべきであろう。

序文の執筆者高槻純之助については、坪谷善四郎『博文館五十年史』に以下のように記されている。「[博文館は]明治二十一年より毎年帝国大学へ奨学金百円づゝ寄附して、学生の養成に充てたので、大学にては其寄附金を三重県士族高槻純之助氏の学資に充て、此年[1890]七月高槻氏は法科大学を卒業せし故、八月以降、本館に聘して、編輯局を主宰せしめ、主として「富国」の編輯に当らした。氏は翌二十四年に退館し、後に三重県上野の中学校長として赴任した。」(45頁)なお、松井柏軒『四十五年記者生活』には「後に衆議院書記官となられたやうだ」(41頁)とある。

そして、9月には『処世活法』が刊行される。

これらの著作に対する評価として見出せたものは『出版月評』第35号(1890年9月)に掲載された『福の神』評のみであるが、かなり手厳しい。

「此書を一読するに、其議論極めて錯雑せるのみならず、訳文直訳に陥り流暢ならざるを以て読者容易に其要領を得がたし。蓋訳者も亦原書の要領を咀嚼提掇したる後、筆を下したるものなりや否や、之を疑はざるを得ず。されども畢竟其大意は「人生の目的は最大幸福を享くるに在り。金銭即ち福の神は此目的を達するに必要なものなれば、銳意専心、之が崇拜貯蓄を怠るべからず。されども自助克己、誠実忠直を以て、之が崇拜貯蓄を為すべく、決して虚偽好邪、貪欲吝嗇、主なるべからず」と云ふに在るもの、如し。かゝる説も時ありて無智懶惰の下民を訓戒するに、入用のこともあらん。されども余輩はかゝる説を贅すること能はず…夫れ黄金崇拜説の我国家を蠱毒するの畏るべきこと此の如し。是を以て識者、之を痛嘆すること久し。而るを訳者又此書の如きものを訳して世に行ふ、何の心ぞや。

噫。」

幸福散史の号は、博文館での活動に先立つ『暁鐘新報』での使用が確認できる。功利主義の立場に立って民衆の幸福を追求しようとする洪江のマニフェストがここに見てとれるのだが、洪江の師の一人である福沢諭吉が「拝金主義」と非難されたのと同様、このような主張は真っ直ぐには伝わらず、激しい反発を受けたことがわかる。

次の『神童』は凡例の署名からすると10月には脱稿され、11月には旧知の島田三郎の序も得ていたようであるが、1891年の新年の刊行となる。そして、4月に『幸福要訣』、5月には処世訓路線の集大成というべき浩瀚な『国民錦囊』が刊行される。「抽斎歿後」によると『幸福要訣』までが1890年の執筆とされている。

ここでこれらの著作について触れておく。

『通俗教育演説』

「スペンサー、ハクスレー、ペーン、ジヨノツト諸氏の教育論、又ハ精神論を折衷し傍ら自説を交へて立案したり」と巻末にあるが、教育における教育学の重要性から説き起して、智育、徳育、体育、美育の領域にわたって「成るべく有益の事項を包含せしめんと欲し」た著作である。食物、衣服、住宅の生活の領域にまで触れている。

『福の神』

*Mammon.*の翻訳。『国立国会図書館蔵書目録 明治期 第1編』では原著者を James Bisset Pratt [(1875～1944)] とするが、James Platt (1831～?) が正しい。前述のしたように、書評で批判されているが、もちろん「幸福の追求」を唱導しこそすれ拝金主義に墮する事を勧めてはいない。福の神と神に対する信仰をバランスさせようという原著者の主張は、キリスト教からすれば異端的なものであるが、そこには福の神に一方的に傾倒するかのように見える産業社会に対する警鐘が含まれる。福の神に対置される神がキリスト教の神であるため、キリスト教臭が強すぎることを洪江は懸念している。

『処世活法』

William Mathews の *Getting on in the world; or, Hints on success in life.* の翻訳。ただし逐語訳ではない。緒言を付し全体を解説し、原著の第4章と12章以降を省く。各章の冒頭に置かれた格言は11章にまとめて訳されている。ただし原著第2章のラ・フォンテーヌ、ル・サーージュ、9章のシェイクスピアとフィラレート・シャルが除かれている。これらの省略はシェイクスピアに関しては短文であるため意味をとるのが難しかったものと思われる。残りは仏文で引用されているため洪江には齒が立たなかったであろう。12、13章は原著を離れてほ

かの書物から適宜選んだ文章と渋江自身の意見を記したとする。底本に使用したのは「忠告叢書」中の1冊として出版された物だという。この「忠告叢書」はロンドンのWard, Lockの *Friendly counsel series.* のことであろう。

Getting on in the world は1887年5月に菊池武徳が『処世之法』として抄訳しており、同年10月に2版、1888年9月には訂正3版が出されている。渋江訳以後も内外出版協会訳で1906年8月に『成功論』として部分訳が出された。また1911年1月に、江口岳東により『処世術修養』として全訳が刊行されている。

なお1899年に *Getting on in the world, or, hints on success in life.* として5章をのぞく冒頭8章が英語教本として出版され、1911年5月には第3章のみの英語教本『職業之撰択』も出版されている。渋江訳も含めた邦訳の多くが4章を割愛していることから、同書には4章を含まずに出版されたヴァリエントが存在するのかもしれない。

『神童』

英雄、活眼家、発明家、政治家、愛国慷慨家、法律家演説家、軍人、学者、著述家、宗教家道徳家、芸芸家、商法家に分けて50人の人物伝を載せる。参考書目として「プルターク氏英雄伝○カーライル氏クロムウエル論○コーケーン氏名家冒険史○フ井スク氏世界百傑伝スミス氏米国百傑伝 ホーン氏ナポレオン伝○クローストン氏逸事選○ゼ、グード、ウラーズ、ライブラリー中の発明大家列伝○同高名少年列伝○同五十名家伝○サウセー氏子ルソン伝○マークパーソン氏ミルトン伝○モリソン氏マコーレー伝○渋江保訳補博文館発行処世活法○同福之神博文館発行日本大家論集○先哲叢談○海保漁村墓碑銘等」が挙げられている。

『幸福要訣』

John Lubbock の *The Pleasures of Life.* の翻訳。著者ジョン・ラボック (1834～1913) は銀行家・国会議員として活躍するとともに、考古学に興味を示し学問研究にも打ち込んだ。これはラボックが手がけた人生論ものの著作の代表作であり、英文教科書としても盛んに使われていた。第二部も含めた本田信教による全訳が『人生の快樂』として金港堂から1902年6月に出ている。同書の構成は原著と異なるが、1907年12月に出た改版『楽天録』では原著どおりの構成に戻されている。また1903年11月に無名氏による正編のみの翻訳『人生の快樂』が嵩山房から出されているほか、1917年3月には橋本弘が『安全生活』の題で15章分を平和出版社から刊行し、翌1918年9月に対訳注釈書の形で5章分を『人生の樂事』として明進社から出版した。ほかに確認できた戦前の訳書には1921年5月洛陽堂刊の小川隆四郎訳『愉快なる人生』がある。戦後の出版では1983年に渡辺昇一が三笠書房から『自分を考える』の題で刊行しているが、これはかなり原著に手を入れた構成になっている。『幸福要訣』は正編の訳で、各章末に俚諺を100つつ付している。

『国民錦囊』

小型本ながら、紙数的には1,300頁を越える大冊である。俚諺一万箇を17項目に分けて収

録したという700頁を越える「古今東西金言俚言集」に、「作文法」「演説法」「勉学法」「処世法」を加え、巻末には佐藤寛公紳甫評選の「皇朝百人一詩」「漢土百人一詩」佐々木弘綱撰の「名家百人一首」収める。実見できたものは、序文に当たる部分が欠落しているため編集意図は不明だが、一名作文演説の良材という副書名から、作文や演説のための引用句集として作られたものと知れる。

洪江は1891年の執筆活動を「国民錦囊。西洋妖怪奇話。英国文学史。独仏文学史。希臘羅馬文学史。小論理学。小心理学。小倫理学。小天文学。小地質学。(皆博文館より出版) 并に雑誌原稿」(「抽斎歿後」185頁)と記録している。

日本における最初期のグリム童話の紹介である『西洋妖怪奇談』を8月に刊行した後、洪江は著書を「通俗教育全書」シリーズから次々と刊行していく。

「通俗教育全書」は当初全6冊の予定で刊行が開始されている⁽¹⁸⁾。後に全12冊と改められ、ここから受験応用と角書の付された歴史書、地理書などの刊行があり、さらに全24冊の予定に変更されて次第に雑多な入門書類を収め、次に全36冊、さらに全50冊が予告され、最終的には100冊の叢書となった。

当初の発兌規程は、紙数を160頁としていたが、コスト面の制限が緩和されたようで、「博文館叢書」中の330頁以下のものの大部分が、1893年に、このシリーズから再刊されている。紙数的に問題が無いにもかかわらず再刊されなかったものは、増刷に適さなかったものであろう。

1892年の執筆活動について、洪江は「普通教育学。万国地誌。万国發明家列伝。泰西婦女亀鑑。算術五千題。代数学一千題。幾何学一千題。簡易体操法。簡易手工学。(以上博文館より出版) 并に雑誌原稿」(「抽斎歿後」186頁)とする。

これらはそれぞれ、同年中に、3月『普通教育学』、6月『万国地理』(万国地誌)『簡易体操法』、8月『代数一千題』(代数学一千題)『幾何一千題』(幾何学一千題)、10月『万国發明家列伝』、11月『算術五千題 上』『泰西婦女亀鑑』、12月『簡易手工学』『算術五千題 下』として出版された。

1893年の執筆活動について、洪江は「ゴールドスミス全世界の市人。ヘーゲル歴史哲学。雄弁法。南亜米利加紀行。魔術。初等三角術。算術教科書。(以上博文館より出版) 并に雑誌原稿」(「抽斎歿後」186頁)と書く。

この年の執筆物から実際の刊行が確認できない資料が見えはじめる。

4月『初等三角術』、5月『支那哲学者欧洲巡遊通信 上・下』(ゴールドスミス全世界の市人)、7月『雄弁法』、そして11、12月に『魔術 上・下』が

刊行されるが、この年7月付の序が付された『歴史研究法 上・下』（ヘーゲル歴史哲学）は翌年2月、3月の刊行となっている。また、これまでに「博文館叢書」から刊行されたものの内『神童』を除く4点と文学史三部作が、この年「通俗教育全書」から再刊された。

「拙斎歿後」に見える『南亜米利加紀行』、『算術教科書』の2冊は、出版が確認できない。後者に関しては鮫島晋による同題の書物が同年6月に刊行されているが、これが実際には渋江によって執筆されたものかどうかは不明である。

再刊本や、脱稿から刊行までに1年近くかかっているものがあるため、例外も生じているが、1893年の後半から渋江は「幸福」の号を止め、「羽化」の号を使い始めている。雅号の変更に關しての回想、きっかけとなる事件は見出せないが、翌年内田魯庵が三文字屋金平名義で刊行した『文学者となる法』の中で、渋江は以下のように戯画化されていた。

「大著述家幸福先生の操觚事業を見よ。先生は『体操法』を著せり、先生は『哲学大意』を著せり、『算術五千題』、『代数一千題』、『幾何一千題』、『初等三角術』、『普通教育学』、『通俗教育演説』、『小倫理書』、『小心理書』、『小論理書』、『小地質学』、『小天文学』、『社会学』、『手工学』、『英国文学史』、『独仏文学史』、『希臘羅馬文学史』、『婦女龜鑑』、『福之神』、『処世活法』、『幸福要訣』、『神童』、『万国發明家列伝』、『西洋妖怪奇談』、『国民錦囊』——（アア草臥れた）——何ぞ夫れ諸般の科学に精通する爰に到れるぞ。人はゲーテが科学に深くミルトンが政治宗教に篤きを驚く。然れども幸福先生が宏博なる大々知識を以て比ぶれば是等皆云ふに足らず。……著述家たらんとする者よ、宜しく幸福先生を学ぶべし。昨日は審美学を説き今日は料理法を談じ明日は海軍術を講じ、其間芋屋の引札を書き伝授屋（斯るもの有りや否や）の広告を草し、猶閑あらば女義太夫の口上を認めお開帳の縁起を立案するも著述家としての一興にあらずや。京童は云ふ。幸福先生の著述一ヶ月凡そ五百頁に上るト。豈是れ区役所門前の代書人よりエラシと云はざるべけんや。」

魯庵ならではの才氣溢れる書きっぷりで、面白く読まれる。それだけに当事者である渋江は閉口したことであろう。雅号の変更が、この「あてこすり」によるものだとすると納得し易いのだが、著作の刊行以前に魯庵が渋江に接触していたことを想定しないと説明がつかず、今のところ魯庵が「幸福先生」に対する何らかのキャンペーンを前年に行っていたという事実は確認できない。

同書は1995年図書新聞より再刊され、また2001年に筑摩書房の「明治の文

学』の魯庵の巻に収録されたが、双方とも「幸福先生」についての注は付されていない。

1894年の執筆活動については、「哲学大意。日々のおきて。人物学。西洋事物起源。記憶術。催眠術。社会観察論。開智術。婢僕管理法。英清鴉片戦史。英仏聯合征清戦史。露土戦史。北米南北戦史。電気世界。婚姻の友。(以上博文館より出版)外に雑誌原稿」(「抽斎歿後」186頁)と記録されている。

2月『哲学大意』『日々のおきて』、3月『人類学』(人物学)、4月『電気世界』『西洋事物起源』、5月『記憶術』、6月『催眠術』と刊行されたほか、1月に『社会学』が出ている。「抽斎歿後」にある「社会観察論」がこれにあたる可能性もあるが、1896年にも「社会観察論(続物)」が出ていること、小引に「明治二十六年十二月」とあり、1893年中の執筆と思われることから、別物を指しているように見える。

『英清鴉片戦史』『英仏聯合征清戦史』『露土戦史』『北米南北戦史』は、万国戦史のシリーズとして刊行されているが、改題されており、執筆者名も洪江ではない。残る『開智術』『婢僕管理法』『婚姻の友』に関しては全く出版情報を欠く。

1895年の執筆活動は、「普墺戦史。波蘭衰亡史。クリメア戦史。印度蚕食戦史。伊太利独立戦史。米国独立戦史。希臘独立戦史。英国革命史。仏国革命史。フリドリツヒ大王七年戦史。(以上博文館より出版)并に雑誌原稿」(「抽斎歿後」186頁)とされる。

これらは、5月『普墺戦史』、7月『波蘭衰亡戦史』(波蘭衰亡史)、9月『印度蚕食戦史』、12月『米国独立戦史』、1896年2月『英国革命戦史』(英国革命史)、3月『仏国革命戦史』(仏国革命史)、5月『フレデリック大王七年戦史』(フリドリツヒ大王七年戦史)として刊行されるが、『クリメア戦史』『伊太利独立戦史』『希臘独立戦史』については別人の名義で刊行されている。

1896年の執筆活動については、「シーザルポムペー羅馬戦史」(一部)。ピュニツク戦史。歴山大王一統戦史。希臘波斯戦史。支那人気質。社会観察論(続物)。世界格言。婚姻案内。(以上博文館より出版)并に雑誌原稿」(「抽斎歿後」186頁)とする。これらは、7月『ピュニツク戦史』、8月『歴山大王一統戦史』、9月『希臘波斯戦史』、12月『支那人気質』、1897年3月『世界格言大全』(世界格言)と刊行され、『シーザルポムペー羅馬戦史(一部)』は岸上操編訳で『セザール・ポムペー羅馬戦史』として刊行されているが、現物には洪江の関与は記されていない。また、『社会観察論(続物)』『婚姻案内』の2点につい

ては不明である。

以後、「抽斎歿後」には1897年、「ロングマンズ、リーダー註釈一。二。三。四」、1898年「世界地理。ナショナル、リーダー註釈一。二。三。四、以上博文館より出版」1899年「本年著訳の書サウセーネルソン伝註釈」とある。『ロングマンズ読本註釈』（ロングマンズ、リーダー註釈）の4冊と、『通俗世界地理』（世界地理）の刊行は確認できるが『ナショナル、リーダー註釈』『ネルソン伝註釈』については不明である。

逆に「抽斎歿後」に記されていない『出世の栞』が1901年3月に博文館から刊行されている。これは大田兼雄の作成した著作目録に「同 三十四年 出世の栞続（稿 大尾迄）」と見える。この目録は大田自身の収集した資料と渋江保の嗣子乙女女史が作成した「羽化著作概表」に拠って作成されたもので、これには「抽斎歿後」に見えない、『フレデリック大王とその宮廷』（1896年）『商家手代案内』『致富要訣』（以上1897年）『フランクリン自伝』（1899年）なる書名が上げられている。

これらのうち『致富要訣』のみ、1898年1月19日に博文館から「日用百科全書」の第26編として刊行されていることが確認できるが、現物の奥付には編輯者大橋又太郎とのみある。同書は、渋江の『幸福要訣』等の内容をふまえているようではあるが、渋江が前面に立って執筆したものか、博文館が既刊書を編集して作った書物なのか、判然としない。

同じ「日用百科全書」の第15編『祝辞演説法』（1896年9月）の鼈頭には「西洋名家の演説」が載せられており、この中の「第十八 ゴールドスマス」は渋江の『支那哲学者欧洲巡遊通信』からの抜粋である。これは渋江自身も後に自著『雄弁法』に名家の演説として再録しており、『雄弁法』の「先輩が雄弁を修養したる実例并に其演説集」をほぼそのまま転載したものが『祝辞演説法』の鼈頭であるようだ。

これは名義上、博文館の編集となっており、渋江が関与して成ったものか、博文館が勝手に作ってしまったものか判然としないが、渋江の訳文が使われていることは確かである。

渋江の記録にあって現物もしくは博文館の雑誌に掲載された新刊広告が確認できない著作は、成稿したものの、博文館で出版を見合わせたものということになるが、こうした例から鼈頭に所載されているため、とおり一遍の調査では発見できない可能性も考えておく必要があるだろう。例えば渋江の『通俗世界地理』は鼈頭に田山花袋の「聖彼得堡」を掲載するが、宮内俊介『田山花袋書

誌』あるいは『定本花袋全集別巻』所載の「書誌」には『通俗世界地理』は採られておらず、この種の調査が非常に困難であることを示している。

1894年「万国戦史」シリーズを手がけるまでの渋江の著作を大まかに分類すると、教育者としての渋江の経験を表出する教育論、そしてそこから派生する自己啓発書、偉人伝である。

このカテゴリーに入ってくるのが『通俗教育演説』『福の神』『処世活法』『神童』『幸福要訣』『国民錦囊』『普通教育学』『万国発明家列伝』『泰西婦女亀鑑』『日々のおきて』である。そして『記憶術』『催眠術』も学習のための技術書としてこのカテゴリーに入る。

第二に、渋江の手がけてきた教育の教科書そのもの、あるいはその補助教材の性格をもつものである。

このカテゴリーに入るのが『西洋妖怪奇談』（本書の目的は神怪妄誕の談中に自ら勸懲の意を寓し以て家庭教育の一部に充てんとに在り一同書凡例）『小論理書』『小心理書』『小倫理書』『小天文学』『小地質学』『万国地理』『簡易体操法』『代数一千題』『幾何一千題』『算術五千題』『簡易手工学』『初等三角術』である。

以上の二つのカテゴリーに入らない作品に渋江の嗜好が表れているのではないか。

ただし、『希臘羅馬文学史』の「緒言（一）文学史ノ必要」に「〔英国文学史〕ヲ編纂シ、殆ント稿ヲ脱セントシタリ。然ルニ今博文館主人予ト所感ヲ均フシ、而カモ全欧ノ文学ヲ網羅セント欲スルニ会フ。」「博文館主人茲ニ見ル所アリ。頃日日本文学史編纂ノ事ヲ某々諸氏ニ嘱シ、又予ニ泰西文学史編纂ノ事ヲ需ム」とあり、『希臘羅馬文学史』『英国文学史』『独仏文学史』の欧州文学史三部作には大橋佐平の意向が強く働いていた。

また『電気世界』に関しては、巻末に「羽化生曰く。本書の原書ハ博文館主大橋佐平君が昨年欧米巡遊の際、合衆国にて購われ、携へ帰られしものなり。令息新太郎君、生が許へ贈り越されて訳述せよと言はる。」(202頁)と記されており、これも大橋父子の企画である。

旧大橋図書館の蔵書を引き継いでいる三康文化研究所附属三康図書館に坪谷善四郎『博文館五十年史』の稿本および、稿本に元づく謄写版が所蔵されている⁽¹⁹⁾。稿本には実際に刊行する際に削除された情報が含まれており、出版史上の重要な資料であることが浅井康男によって指摘されている。

この稿本は、「創業以来大好評の出版図書」として坪谷の1911年時の手控え

と1912年の記録から図書の出版部数に触れている。ここに「通俗教育全書」の中で売れ行きの良かったものがあげられており「第七編 谷口政徳著（日本小歴史）十四版 三万二千 第百編（電気世界）再版 二千五百」と刊本にない洪江関連の記述が見える。

『電気世界』が同叢書中で二番目に売れた本とも思われず、後者は『日本小歴史』との対比のために載せられていると見るべきであろう。もっとも、これは同叢書の平均的な部数を示しているのか、売れ行きの悪かった物の例として挙げられているのか、数字の性格は不明である。しかし、博文館における洪江の著作の部数が全般的にこの程度であったとすれば、その定価設定を勘案すると1冊毎に支払われる稿料はかなり小額になると思われ、生活のためには原稿の量産が至上命題となっていたことがうかがわれる。

「万国戦史」シリーズにとりかかる以前に洪江が著した書物は、さらに『支那哲学者欧洲巡遊通信』『雄弁法』『魔術』『歴史研究法』『哲学大意』『人類学』『西洋事物起源』『社会学』の8点がある。

これらの書物から洪江の執筆の志向を検討してみよう。『西洋事物起源』は発明（家）をキー・ワードに考えれば偉人伝から派生したのものとして、また、『雄弁法』も演説が盛んだった当時においては、処世上必要な技術ということで、第一のカテゴリーに入れることが出来るだろう。

『魔術』は奇術の種本で、趣味本であるが、頓智算等、算術の問題も取扱っていることから第二のカテゴリーの要素も含んでいる。『人類学』も有史以前の事象を扱っている点で教科書としてポピュラーなものではないが、構成的には第二のカテゴリーに入る。これを洪江の歴史への興味が、その始原へ向かった例と見ることも可能かもしれない。

『社会学』は、スペンサーの *The principles of sociology* をもとにしている。洪江は慶應義塾時代に「スペンセル スタデーオフソシオロジー」を学んでおり、1882年1月25日の山田要蔵への手紙で、「塾ニテソーシヤロジノ廃止ハ如何ナル議論ヨリ出テシカ。」⁽²⁰⁾と『慶應義塾社中之約束』に載せられているカリキュラムからスペンサーが落とされた時に疑問を呈しており、以前からスペンサーに強い関心をよせていた。

なお同書には「病中に稿を起し、病中に稿を脱したるものなり。」とあり、序の署名に「十二月」と記していること、前著『魔術』の序に「十一月」とあることから、1893年末には体調を崩していたようである。この『社会学』には土地所有に関する三つの論考が付録として掲載されているが、これらはかつ

て『日本大家論集』に掲載されたものの再録であり⁽²¹⁾、執筆の労力を減じるためにこのような処置がとられたものと思われる。

『哲学大意』については各巻（章）に関して、以下の様に準拠した書目あげられている。

- 1 哲学の論拠 スペンサー氏の哲学原理 *First principles*
- 2 哲学小史 バックス氏の哲学史 *Hand-book of the history of philosophy*、
スミス氏の古代哲学 *Chief ancient philosophies*
- 3 論理学 ジエボンス氏の論理学 *Elementary lessons in logic*
- 4 心理学 英人ベーン氏
- 5 倫理学 仏人ジャヤ子一氏
- 6 社会学 「極めて之を略」すとする。
- 7 法理学 アウスチン氏の法理講義 *Lecture on jurisprudence*

ここから渋江が参照していた書物を知ることは出来るが、概説書ゆえ、渋江の志向は直接的には表れていないと思われる。

『歴史研究法』はヘーゲルの『歴史哲学講義』の訳である。後述する『日々のおきて』の中で、自身の好む書の一つにあげており、渋江の意向が強く反映されて刊行に至ったものと思われる。

『支那哲学者欧洲巡遊通信』はオリヴァー・ゴールドスミス *The citizen of the world* の翻訳である。この英国を訪れた中国人に仮託して英国の姿を諷刺した書物は、ほかの渋江の著作からすれば特異な書物である。自身で「…只訳者始めてこの類の訳述に着したるを以て、心卑怯ち筆鈍りて…」と記しているにもかかわらず、敢えて翻訳を行い、書中の挿話を他所でも紹介していることから、この書物に非常な関心を持っていた事が推測される。

渋江の漢学の教養からすれば、東洋に関する限られた情報に基づく、ヘーゲルの記す東洋史、ゴールドスミスの描く中国人の姿に違和感を覚えても不思議はないと思われるが、後に『支那人気質』*Chinese characteristics by Arthur H. Smith* も訳しており、逆に西洋人の目を通した中国像が新鮮であったのだろうか⁽²²⁾。

いわゆる西洋の中国趣味、中国イメージである「シノワズリ」は日本の漢学者にどのように受容されたのかという問題は、日本人にとり、文明の源として崇敬の対象であった中国が侵略の対象と変容していった経緯を探る上で重要であろう。渋江のこの3冊は、西洋視点の中国イメージがどのように広まっていたのかを研究するための有用な資料といえる。

この時期における渋江の日常生活の一端を伺わせるのが、『日々のおきて』

に見える以下の割注である。

「晨起前の時間を読書に用ゐて意外の利益あることは羽化生現に之を実験せり。生は数年前より一日を三分して其二を著訳に充て、其一を読書（科目を定めて）に充て、其他に晨起前を以て随意的読書に充て居ることなるが、この晨起前の時間といふは僅かに二時間又は一時三十分なれども、その結果は思ひの外の上出来にづゝ読了て、毎年一部平均五冊の書、五十二部許するを得るなり。」(15頁)

同書は「フラスター氏の *The Advices for Every-day Life* に基きて編纂したるものなり。」とされている。原本の確認は出来ていないが、明らかに日本向けの内容に書き改められており、おそらく原著の構成のみを下敷きにし、個々の「掟」に付随する説明部分の大半は渋江が独自に用意したものと思われる。

この本で渋江は、目を通すべき本としてジョン・ラボックが選定した世界の重要な書物 100 冊のリストを掲載するとともに、

「羽化生の好む所に拠れば、右の外、古今著述家の著書中より十部を挙げば、 1 スペンサー著、総合哲学 (*Synthetic Philosophy*) 2 ラスキンの著、近世画人伝 3 ラボック著、人生の快樂 (*The Pleasure of Life*) 同 文明起原論 (*Origin of Civilization*) 以上現今著述家の著書 4 ヘーゲル著、歴史哲学講義 (*Philosophy of History*) 5 スートニアス著、羅馬十二帝紀 (*Lives of the Twelve Caesars and Lives of Grammarians*) 6 ユーゴ著、哀史 (*La Miserable*) 7 フリーマン著、史類 8 バンクロフト著、米國史 9 モンセン著、羅馬史 10 ランケ著、史類 など見るべき価値あるものなり。」と 11 点の書物を挙げており、渋江の興味の重点が歴史にあったことが見てとれる。

これらの内「ラボック著、人生の快樂」は『幸福要訣』、「ヘーゲル著、歴史哲学講義」は『歴史研究法』として渋江自身が訳しているのだが、敢えてそれに言及しないのは抄訳で不完全なものであるとの認識に立ったものであろうか。

和書については重野成斎の『史家必携すべき書目の大略』を、漢籍に関しては賀賀侗庵の『読書矩』を掲げ、和漢洋の別なく研學に励むことを勧めているが、ここからも、興味の中心が歴史にあったことがうかがえる。

「漁村先生及び令息竹逕先生、并に太田錦城先生の詳伝と三先生の学説等とは、羽化生之を草し置けり。機を見合はせて世に公にすべき心得なり。」(下,49頁)とも記しており、博文館での翻訳を中心とした著作活動の一方で、漢學への興味は失われていなかったことがわかる。

5. 渋江保の執筆活動（その2）「万国戦史」シリーズ

1894年10月、「万国戦史」の刊行が開始される。

『博文館五十年史』には万国戦史に対して相反する記述が残されている。

「戦争に因みて「万国戦史」を発刊し、第一編「独仏戦史」、第二編「英清阿片戦史」第三編「拿破侖戦史」第四編「英仏聯合征清戦史」第五編「露土戦史」第六編「北米南北戦史」等を出版した。然れども時代の要求は専ら当面最近の事実を知らんと欲し、其以外の出版は多く顧みられず、」（90頁）

「既に「日清戦争実記」に大好評を博するや、続いて幾多の戦役関係書を出版した。即ち二十七年十月以来「万国戦史」を月一回（定価十八銭）にて出版した。その題目と著者は 第一編 川崎紫山著 独仏戦史。第二編 松井柏軒著 英清鴉片戦史。第三編 野々村金五郎著 拿破侖戦史。第四編 松井柏軒著 英仏聯合征清戦史。第五編 越山玉坡著 トラファルガー海戦史等にして、何れも時好に投じ当時上梓された、幾多の戦史物中の白眉と称された。」（112頁）

初期の広告は全12巻となっており、最終的には全24巻と拡大されていることから、当初はそれなりの売れ行きを見せたものと思われるが、『日清戦争実記』の売れ行きを前にした時、その売上げが非常に小さな数字に見えたということであろうか。

売上げはともかく、渋江の著作として現在、多くの図書館に蔵書として伝わっており、古書市場においても一番手に入れ易いのがこの叢書である。ちなみに谷沢永一「司馬さんの書庫・蔵書を探検する」には「ひとくりに分類されているのは戦史と軍事書。加登川幸太郎『三八式歩兵銃』の類が入念に蒐められており、明治刊行の『万国戦史』（博文館）まであるのには畏れ入った。」（27頁）とあり、司馬遼太郎も架蔵していたことが知れる。

万国戦史の一覧を以下に掲げる。

- 1 『独仏戦史』川崎紫山著
- 2 『鴉片戦史 一名・英清戦史』松井広吉著
- 3 『拿破侖戦史』野々村金五郎著
- 4 『英仏聯合征清戦史』松井広吉著
- 5 『トラファルガー海戦史』越山平三郎記述

- 6 『露土戦史』松井広吉著
- 7 『米国南北戦史』松井広吉著
- 8 『普墺戦史』渋江保著 (21)
- 9 『ナイル海戦史』越山平三郎訳
- 10 『波蘭衰亡戦史』渋江保著 (22)
- 11 『クリミヤ戦史』松井広吉著
- 12 『印度蚕食戦史』渋江保著
- 13 『英米海戦史』越山平三郎訳
- 14 『伊太利独立戦史』松井広吉著
- 15 『米国独立戦史』渋江保著
- 16 『希臘独立戦史』柳井綱斎(碌太郎)著
- 17 『英国革命戦史』渋江保著
- 18 『仏国革命戦史』渋江保著
- 19 『三十年戦史』国府厚東著
- 20 『七年戦史 フレデリック大王』渋江保著
- 21 『羅馬戦史 セザール・ポムペー』岸上操編訳
- 22 『ピユニック戦史 羅馬・架爾達額』渋江保著
- 23 『歴山大王一統戦史』渋江保著
- 24 『希臘波斯戦史』渋江保著

この中で松井広吉、柳井綱斎の著作となっているものを渋江は自著として「抽斎歿後」に記し、岸上操の『羅馬戦史 セザール・ポムペー』にも関与しているとする。

現物を見ていくと、2『鴉片戦史 一名・英清戦史』4『英仏聯合征清戦史』7『米国南北戦史』21『羅馬戦史 セザール・ポムペー』への言及はないが、6『露土戦史』については『普墺戦史』の3頁割注に「予ガ曩キニ「露土戦史」ニ於テ述ベタル所ナリ。」とあり、110頁割注に「生曩キニ「露土戦史」ニ於テ之ヲ述ヘタレド」と記されている。

11『クリミヤ戦史』については『波蘭衰亡戦史』56頁に「渋江保著。クリミヤ戦史」、97頁に「渋江保著クリミヤ史」、『印度蚕食戦史』314頁割注「曩キニ羽化生ノ著ハシタル「クリミヤ戦史」ヲ参看スベシ』『七年戦史 フレデリック大王』262頁割注「羽化生著『クリミア戦史』『神童』ニ伝アリ」と書く。

14『伊太利独立戦史』について『ピユニック戦史 羅馬 | 架爾達額』の11頁割注に「但シ曩キニ羽化生訳『伊太利独立戦史』ノ中ニ引用シタリ」と書き、16『希臘独立戦史』は『希臘波斯戦史』24頁「羽化生曩キニ『希臘独立戦史』

ノ中ニ載セタレバ」30頁「曩キニ著シタル『希臘獨立戦史』」36頁「羽化生著『希臘獨立戦史』ト同ジク」41頁「生既ニ『希臘獨立戦史』ノ中ニ載セタレバ」と書かれている。

ゴースト・ライター扱いされた洪江の精一杯の抵抗とも見えるこうした注釈が削除されず、そのまま出版されていること自体が不思議である。これらは編集者が原稿に目を通す暇もないほど慌ただしいスケジュールで出版されたことを示すものか、それとも編集というプロセス自体が存在しないほどの放任状態であったということなのか、さらなる調査が必要とされる。

ともかく、他人名義で出版された著作の注の記述と、洪江の名が明示された著作のそれに差異があることから、他人名義によるものはおそらく草稿段階で洪江の手を離れ、最終的な校正は別人によってなされたものであろう。

これらが松井広吉、柳井綱齋によってどの程度手が増えられているのかを検討する必要があるが、松井については中央新聞の記者として従軍したということが営業施策上重要視され、また柳井の場合は『日清戦争実記』の主筆となった人物に、戦史関連の著作を持たせたいという意向が主であったと推測される。このような前提から、洪江の草稿には、さほど手は入れられていない可能性が高い。なお、岸上の『羅馬戦史 セザール・ポムペー』は明らかに異質の文体で綴られており、洪江の関与はごく一部にとどまるものと思われる。

この「万国戦史」で洪江が付した注に興味深い事実が含まれる。ここで洪江は西洋史の古典を多数翻訳予定、もしくは訳了しているとしているのである。同じ書物に対して複数の言及があるが、本文では以下に一例ずつ挙げる。全体は注⁽²⁵⁾を参照されたい。

『十九世紀史』(Mackenzie's *The 19th Century, A History*.か)

「墨西哥征討ノ事ハ、近日「十九世紀史」中ニ載スベケレバ、就テ見ルベシ。」(『普墺戦史』255頁割注)⁽²⁶⁾

『ウ井リアム一五世』

「他日世ニ公ニスベキ『ウ井リアム一五世』ノ中ニ」(『英国革命戦史』253頁割注)

『クロムウエル』

「他日世ニ公ニスベキ『クロムウエル』ノ中ニ」(『英国革命戦史』297頁)

『チャールス五世』

「他日公ニスベキ『チャールス五世』ノ中ニ」(『英国革命戦史』12頁割注)

『マールブロー』

「他日世ニ公ニスベキ『マールブロー』ニ詳ナリ」(『七年戦史 フレデリック大王』231頁割注)

『フレデリック大王、及ヒ其ノ時世』*Carlyle's History of Friedrich II of Prussia, called the Great.*

「他日公ニスベキカーライル著羽化生訳『フレデリック大王、及ヒ其ノ時世』ニ就テ見ルベシ」(『七年戦史 フレデリック大王』263頁)

『売淫史』*Sanger's The History of Prostitution.*

「サンガー著『売淫史』ニハ、…他日同書ヲ翻訳シテ、之ヲ世ニ公ニスベシ」(『七年戦史 フレデリック大王』333頁)

『リヴ井一羅馬史』*Livy.*

『モムセン羅馬史』*Mommsen's Hisotry of Rome.*

『メリヴェール羅馬史』

『ストニアス羅馬十二帝紀』

『ギツボン羅馬衰亡史』

『モンテスキュー羅馬盛衰記』

「因ニ云フ。生曩キニリヴ井一。モムセン。メリヴェールノ三羅馬史。ストニアスノ羅馬十二帝紀。ギツボンノ羅馬衰亡史。モンテスキューノ羅馬盛衰記ヲ訳シテ、悉ク稿ヲ脱セリ、他日世ニ公ニスヘシ。」(『ピユニック戦史』序4-5頁)

『プルターク英雄伝』*Plutarch's Lives.*

「プルターク其ノ『英雄伝』…羽化生之ヲ訳シテ既ニ稿ヲ脱セリ。他日ヲ待チテ、世ニ公ニスベシ。」(『ピユニック戦史』24頁割注)

『希臘神代紀』(*Scull's Greek Mythology.*か)

「近日公ニスベキ『希臘神代紀』」(『歴山大王一統戦史』40頁)

カーシアス『歴山史』

「カーシアス…其ノ著『歴山史』ハ、羽化生悉ク翻訳シタリ。大部ナルヲ以テ未タ世ニ公ニスルノ機会ヲ得ズ。」(『歴山大王一統戦史』95頁)

カーシアス著『希臘史』*Curtius's History of Greece.*

「他日公ニスベキカーシアス著『希臘史』ノ中ニ」(『歴山大王一統戦史』125頁)

『グロート希臘史』*Grote's History of Greece.*

「羽化生訳『グロート希臘史』ノ中ニ詳ナリ」(『希臘波斯戦史』123頁)

ヒロドタス『史記』

「ヒロドタスノ『史記』ハ、羽化生曾テ訳了シタリ。他日世ニ公ニスベシ」

『希臘波斯戦史』286頁)

ブルーム子ル著『上代希臘人家内ノ生活』*Blunner's The Home Life of the Ancient Greece.*

「予ノ翻訳セルブルーム子ル著『上代希臘人家内ノ生活』ニ於テ見ルヘシ」
『希臘波斯戦史』296頁)

これらが実際にどの程度訳了されていたかは不明であるが、ともかく西洋史に関する多数の書物の刊行を計画していたことは間違いない。万国戦史の最終巻『希臘波斯戦史』の序に洪江はこう記す。

「今や『万国戦史』発兌以来、巻を累ぬること既に二十四。愈々本書を以て局を結ぶこととは為りぬ。大体より言へば、西史に載する所の古今の戦史は殆んど網羅したりと称するも不可なかるべし。然れども、猶補ふべきもの少なからず。例へば、希臘英雄時代の戦記。波斯サイラス大王の征服史。ペロポン子サス戦史。マリ阿斯、シラ内乱史。アウガスタス羅馬一統史。英仏百年戦史。薔薇戦史。チャールス瑞典王十二世史、チャールス五世独逸帝史、瑞西独立史等の如きは、其の最も著しきものなり。余は自今漸次に是れ等諸史を編纂し、既刊の戦史と相合して、以て一面に於ては、箇々別々の戦史たり、又一面に於ては、各自の間を連絡して、上古より現今までを貫通せる一箇の万国史たらしめんことを期するものなり。」(原文は漢字カナ)

ここから洪江の意図が戦史の紹介にあったわけではなく、歴史一般にあったことがわかる。博文館の日清戦争にあわせた戦時物の出版企画に対し、洪江がどれほど関与していたかを知ることは出来ないが、万国戦史24冊の中の17冊(うち7冊は他人の名義となっている)を執筆し、さらにもう1冊にも部分的に関わったとしていることから、その全体のプランは洪江によって組み立てられた可能性が高い。博文館の「戦史」という言葉に対するこだわり、意味づけに関しての検討も必要となるが、洪江は自らの意図した西洋史を「戦史」という枠組みの中へ収めるために腐心することになったと思われる。

今井宏は『明治日本とイギリス革命』で洪江の『英国革命戦史』を「本来は「戦史」として企画されたにもかかわらず、本書の三分の二は「英国革命ノ原因」に費やされており、主題であるはずの革命の戦闘に関する叙述はほぼ百ページあまりで…明らかに著者の構成の失敗によるものであって、叙述の不均衡は蔽うべくもない。」(203-204頁)と評しているが、これは図らずも洪江の著作が明らかに「戦史」を逸脱していたことを示している。

洪江は多くの内容を盛り込もうとして紙幅の制限に苦しんでいる模様を諸所で表しており、構成の失敗と見える部分も多い。しかし、博文館が用意した「戦史」というパッケージ内で許容された叙述の範囲と、そこからの逸脱にこそ注目すべきであろう。

序に見える続刊のプラン、そして洪江が訳了したという大量の史書。これらが日の目を見ることはなかった。洪江は当然「西洋史叢書」といった企画を自身の主導で実現させたはずであるが、博文館は「万国戦史」の手応えから、商業ベースにのらないと判断し却下したと思われる。

先に述べたとおり、1897年、洪江は「◎此の年八月不慮の災難を受」け頭部を負傷したという。この年たとえ半年間しか活動していなかったとしても、以前のペースであれば、著作が『ロングマンス読本註釈』だけであったとは思われない。そこから、この時期から博文館との関係に亀裂が生じ始めていたのではないかとも推測されるが、結論を出すには、あまりに情報が乏しい。

この年9月の根本羽嶽入門、そしてそれに先立つ4月から島田篁村のもとの受けた詩経講義の筆録の存在が示す漢学再入門の動きは、「西洋史叢書」構想の挫折を色濃く臭わせている。

英語訳からの重訳とはいえ、西洋古典の翻訳が大衆向けの叢書として陸続と博文館から刊行され、漢籍や日本の古典と並立する形で読まれていたとすれば、明治の文化状況は非常に違った様相を見せていたと思われるが、現実はそういった方向に進まず、英学者としての洪江の凋落をここに見ることができる。

しかしその一方で、この「万国戦史」叢書は国内にとどまらない影響を残しており、その点では洪江の著作中でも特に重要なものと考えられる。

さねとうけいしゅう『増補中国人日本留学史』（増補版第2刷）によれば、1900年、最初の清国からの留学生であった戩翼翬がその中心となって、訳書彙編社という清国留学生による日本書漢訳の団体が作られている。同社は『訳書彙編』という学術書をアンソロジー形式で漢訳する雑誌を同年12月に創刊し、1901年からは単行本も刊行していく。その初期のタイトルに洪江の『波蘭衰亡戦史』があった。訳者は訳書彙編社同人となっている。これは第1冊となっており広告等には全2冊とあるが、第2冊が実際に刊行されたかどうかは確認出来ていない。

同じさねとうの『中国留学生史談』によれば、訳書彙編社は神田区駿河台鈴木町18番地（神田区駿河台2丁目3番地）にあった、清国留学生会館に販売部を置いて出版活動を行っている。同会館には教科書訳輯社の販売部、湖南編

訳社他の発行所もあり、留学生の出版本部としての性格も担っていた。ここで発行された雑誌の中には、後に洪江が「支那語」教授を受けたという劉成禺の関わる『湖北学生界』もあった。

この雑誌の2箇所洪江の名を見いだすことが出来る。まず、第3期の広告「訳成近刊書目」の中に、「法国革命戦史 澁江保著」があった。同じ頁に「湖北学生界社又白」という文言があることから、同社の広告であると思われるものの、第1～3期の表4に掲げられた「本社同人訳成近刊書目」の方には、この広告に掲げられた書目が見えず、実際に刊行に至ったかどうか不明である。

もう1点は第4期：光緒29年4月の論説欄に掲げられた、「中国民族論」にの冒頭の一文である。「是篇大致以英人狄羅氏中国民族盛衰滅亡史為粉本參以日本前文部大臣尾崎行雄氏支那処分案洪江氏支那亡国記其他各書…」とあり、この洪江氏に、洪江保以外の人物を充てることは困難だと思われるが、「支那亡国記」がいかなる著作を指すの不明であるため確言は避けざるを得ない。

漢訳された日本書目録として実藤恵秀監修／譚汝謙主編／小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』がある。同書には洪江保の著作として以下の9点が見える。

波蘭衰亡戦史（第一冊） 澁江保（著）東京 訳書彙編社 1901（実藤410）

普奥戦史 羽化生（著）趙天驥（訳）上海 商務1902（光緒28）（戦史叢書第1集）

波蘭衰亡史 澁江保（著）薛公俠（訳）上海 鏡今 1904（光緒30）

印度蠶食戦史 澁江保（著）汪郁年（訳）杭州 訳林館 [1911年前版]

佛国革命史 澁江保（著）人演社（訳）上海 人演社 [1911年前版]⁽²⁷⁾

美国独立戦史 澁江保（編）東京留学生（訳）上海 商務 [1911年前版]
（戦史叢書 第1集）

社会学 澁江保（著）全鳴鸞（訳）上海 開明 [1945前版]

泰西事物起原 澁江保（編）傅運森（訳補）上海 文明 [1945年前版] 5冊

羅馬文学史 澁江保（著）何震彝（訳）上海 開明 [1945年前版]

また、大阪経済大学教授の樽本照雄氏は、日本澁江保編纂／上海広智書局同人訳述『泰西事物起原』（上海 広智書局・光緒28年12月20日）を架蔵されているという。同氏の編纂された『新編増補 清末民初小説目録』には

s0751 食人国（日）羽化仙子著 覚生氏訳 河北粹文書社 光緒33年（1907）

s0752 食人国（日）羽化仙子著 覚生社訳 河北雑文書社 1907

s08561914 世界発展倶楽部（冒険小説）孟文翰訳 北京法政同志研究会
『法政学報』2巻4-7号 1914.4.25-8.15

の2種3点が見える。前者はおそらく洪江＝羽化仙史の『食人国探検』と見て間違いのないと思われるが、後者に関しては単に題名が洪江＝乾坤独歩『世界発展倶楽部』と共通しているだけのものかもしれない。

また中国関係では、昭和30年代に易学方面の関心から洪江保を調査していた大田兼雄が「羽化洪江保翁伝資料のために（五）」で中山久四郎「章炳麟と日本人」に洪江の名が出て来ることを指摘している。中山の文章は以下のとおりである。

「章氏の学術研究と日本との関係はなかなか深いものがありますが、其著書中に特筆している日本人の先哲及び近代の学者を列挙すると、物徂徠 太宰春台 安井息軒 西郷隆盛 福沢諭吉 岡本監輔 中江篤介 村上専精 洪江保 岸本能武太 姉崎正治 武島又次郎 白河次郎 遠藤隆吉 児島献吉郎 照井全都 館森鴻 太田代恒徳 川喜多大尉 「日本之一博士」（白鳥庫吉博士らしく思われます。）以上二十人。」

章炳麟との関わりからすれば、当然出てくるべき幸徳秋水や北一輝の名が見えず、逆に川喜多大尉の名があがっていることから、疑問が生じる。

幸徳と北の名が避けられたことは時代的な背景にその原因を求めることができるが、何故に川喜多大尉が取り上げられているのであろう。川喜多大尉は「先哲及び近代の学者」なのであろうか。川喜多大尉を評価した文章が別にあるのかもしれないが、岩波文庫の『章炳麟集』に収録された「中国の川喜多大尉袁樹勳」においては売国奴の代名詞として「川喜多大尉」が使われている。ここから中山の列挙した日本人は、厳密に章への影響関係を検討した上で挙げられたものではなく、単純に章の文章中に出てくる日本人名を抽出したもので、章が洪江の著作を引用したことを示しているだけではないかとも思われる。

また洪江の著作は朝鮮語にも訳されており、金秉喆『韓国近代翻訳文学研究』に収められた「西洋文学翻訳年表」に以下の書目が見られる。

1899.6 美国独立史 玄采 皇城新聞社

1899.11.10 波蘭末年戦史 魚瑢善 塔印社

1900.6 法国革新戦史 皇城新聞社

1905.10.20-12.10 歴史概要（波蘭末年史）『大韓毎日申報』

1908.5.10 普魯土国厚礼斗益大王七年戦史 兪吉濬 廣学書舗

1909.9.11-10.3.5 「米国独立戦史」玄采『大韓毎日申報』

「歴史概要（波蘭末年史）」のみ『大韓毎日申報』の複製版により連載を確認しているが、玄采による「米国独立戦史」の掲載は確認できなかった。

玄采（1856～1925）については澤田哲「開化期の教科書編纂者としての玄采」があるが、渋江保に関しては言及がない。兪吉濬（1856～1914）に関しては邦文でも多数の研究があり、金鳳珍「近代における東アジア知識人の国際政治観」は「(2) 時代思潮への認識と「愛国啓蒙思想」で「万国戦史」の翻訳について触れている。同論文に拠れば『七年戦史 フレデリック大王』および、松井広吉著となっている『クリミヤ戦史』が刊行されたほかに、草稿として渋江の『波蘭衰亡戦史』と、松井広吉著とされている『伊太利独立戦史』の訳が残されているという。

もっとも「万国戦史」中の渋江の著作が清国、朝鮮で多く翻訳されていたことは、特に渋江の著作が優れていたからではなく、類書がほとんど見られなかったことに起因すると見るべきであろう。欧米、そして日本によって、亡国の危機にさらされていた朝鮮、清国にとり、世界史の動き、わけてもポーランドの事例は強い関心を持たれていたと考えられ、渋江のそれは彼の地において時宜を得た書物とされたと思われる。

以上に挙げた以外にも漢訳、朝鮮語訳された渋江保の著作は存在すると推測されるが、それについての調査は今後の課題としたい。

6. 渋江保の明治30年代

渋江は1897年9月、易学の大家として知られる根本通明（1822～1906）に入門する。東京都公文書館に残る学事文書を吟味すると、根本通明（羽嶽）は家塾を1890年10月に創立し、1895年に神田区駿河台袋町から麹町区飯田町へ移転、1897年2月14日に「根本義塾」という名称を「義道館」と改めている⁽²⁸⁾。さらに3月には設立者が根本通明から根本通徳に改められている。5月時点での統計によれば義道館自体の校長は根本通徳となっており、生徒32名、教員1名とある。ここから渋江は個人的に通明に入門したもので、義道館への入塾では無かったように見える。

渋江の講義筆記の一部が現在、文教大学に蔵されており⁽²⁹⁾、そこには9月13日「根本羽嶽周礼講義 起業」と記されている。翌年2月21日に、これを卒業、引き続く、4月4日の毛詩講義の筆記がその後綴られている。1898年5月時点での統計によれば義道館の生徒数は55名、教員は一挙に5人に増えて

おり、校長は根本通明となっている⁽³⁰⁾。

この8月30日に洪江は義道館の講師を嘱託され、12月17日には評議員も託されたという。1898年末時点の統計⁽³¹⁾の教員数に変化はないため、欠員を補う形で塾にまねかれたものだろう。文教大学に残る筆記によれば、1899年5月10日から周頌講義が始まっている。この5月時点での統計には、前年末の数字からの変化は見られない⁽³²⁾。

9月3日付で申告された学科のあらましでは、初等科・中等科・高等科に分けて経書、歴史、諸子、文集、作文を教授するカリキュラムが提示されており、この時期から拡大路線をとっていたことが見てとれる。11月2日付けの進達書が残されており、ここに見える義道館の教員は以下のとおりであった⁽³³⁾。

蒲生裕之助、丸井圭次郎、山田謙吉、吾妻兵治、細井湛、洪江保、山川早水、竹内孝本、末安信義。

統計として見出せるのは翌1900年5月時点のものまでであるが⁽³⁴⁾、この年に学級数が1から3に増加し、教員数は12名、生徒数は100名であった。そして学科は「英語・国語」と記されている。

『独立評論』での談話「根本通明翁」において洪江は「私は久しく翁の門に学んで居たが、しかし学説に於ては必ずしも翁に感服せず、寧ろ十中八九までは反対の意見を持つて居つた。」とする。しかし根本は洪江を余程買っていたらしく、「倅は学問の方は好きでないし、門人にも之れといふ者もない、ついでには貴方にお願ひするが一つ私の学派を継いで呉れないかとの話。私は前に言つた通り翁の門人とはいふもの、其学説は十の九までは反対なので、もとより其の学派を継がうなど、いふ志もない、挨拶に困つて躊躇をして居ると、…学統継承の話も私あまり乗気にならぬので其儘中絶してしまつた。」と述懐されている。

東京都公文書館に残る学事文書からは、これ以降の義道館の動静をたどることは出来ないが、1902年8月の小石川への移転⁽³⁵⁾、1904年の1月に「義道館の拡張」の記事が新聞に見える⁽³⁶⁾。洪江がどの時点まで義道館に関わっていたかは不明であるが、遅くとも1905年7月に品川へ転居した時点で、義道館との関係は薄くなっていたと思われる。根本羽嶽の死去とともに凋落していったのであろうか、義道館自体のその後も不明で、1909年に小石川区長から以下の様な回答が提出されている。「義道館八月日不詳設立者死亡シ自然廃院同様ニテ現ニ校舍ノ存在ヲ認メス」⁽³⁷⁾。

なお、義道館の教員としても活動していた蒲生裕之助の父蒲生重章の死に際

して、次のような記事が出ている。

「●文士墓前の奇遇 奇人伝の著者蒲生重章氏先頃みまかりて遺骸を谷中天王寺に葬られぬ。此日氏が生前の知己たる文哉微笑菘羽里隠士の三星そを見送らばやと早朝より谷中へ行きしに式はまだ二時間の後と聞きて、その間に先輩の苔や払はん下心あり、隠士曰ふ此先き感應寺は洪江道純の墓あり、之いて尋ねずやと、抑も道純は弘前の医にて狩谷掖齋等と友たり博覧の士にて和漢の書ほとほと読み知らぬものなければ多紀菫庭只管に頼みて経籍訪古志を編述せし程なれば見ぬ世の友を慕へるいかでなほざりにすべき、すぐさま同寺に到りてそこはかたなく石仏あさりしかど夫かと思ふものもなく、凡一時間が程徒に過せしが、折ふし仙台平の袴に黒紋付の羽織いかめしき一人の紳士、桃の枝を携へて墓地深く進むを見しかば、こなたも無意識の内にその方へと赴きたり、斯くて件の紳士は只ある石塔の苔を払ひ花を手向けて暫くが程誦念し了りて立かへりさまに、文哉と顔見合する途端、いや、これは山縣君か何しに、と問へば文哉も、之は之は洪江君久し振りぢやと語を合せてイみしが其紳士は隠士も微笑も皆知れる洪江保氏にてありき、之は不思議と隠士そばより洪江道純の墓尋ねあぐめるよし語り出づれば氏は懐旧の感にや打たれけんさしうつ向きて頓には語も出でざりしが、良久ありて道純は予の亡き父なり、今日しも忌日に相当しければ墓参したるばかりとて、今しがた払ひし墓前に導きしかば、三星たく喜びて君が道純先生の御子息とは今の今まで知らざりし多年の粗忽は赦したまへ、之れも精霊の介させ給へるにやあらんとて俱に共に墓前に額づき、相携へて蒲生氏の葬儀に列りしとなん」(『読売新聞』1901年3月24日)

文哉は山縣文哉、微笑は大橋微笑と思われるが、菘羽里隠士については調べがついていない。この三人と洪江の関わりについては不明であるが、鷗外が抽斎に興味を持つ遙か以前にこうした記事が、新聞紙面をかざっていたのである。ただしこの記事では、父抽斎の忌日であるかのように読めるが、抽斎の命日は8月28日であり、これは長子恒善(3月10日歿)を弔うための墓参であつたはずである。

洪江は1899年に「◎七月三日、自今東京瓦斯株式会社の翻訳事務を担当す。」(「抽斎歿後」187頁)としている。これは大橋新太郎の引き、もしくは大橋佐平の推挙があつたのではないかと推測される。

坪谷善四郎『大橋新太郎伝』は、大橋新太郎が1898年9月東京瓦斯会社専務取締役役に就任し、10月7日一端全ての社員を誡首し、有能な人材のみを再

雇用するという大改革を行ったとする。この改革について東京ガスの社史『東京ガス百年史』では言及されていないので、実際どの程度の組織再編があったかは不明である。松井柏軒『四十五年記者生活』は、東京瓦斯との関わりを大橋新太郎実業界進出の初陣として言及し、「即ち会社を整理して随分思ひ切つた英断を敢行し、年若い人材を擢用して、総てが適材適処で、一々急所を外れなだったので、世間一般その武者振りの鮮かさにアツと感嘆した。」(67頁)としている。

1903年、「〇八月二十九日東京瓦斯株式会社の翻訳事務に従事するの約を解く」(「抽斎歿後」188頁)とあり、ここには、その前年12月、大橋新太郎が専務取締役を辞して平取締役となったことが影響しているのかもしれない。

1900年3月21日には世界漫遊に旅立つ大橋乙羽の送別園遊会が秋涛荘で開かれており、参加者に洪江がいたことを江見水蔭が『自己中心明治文壇史』の中に記している(326頁)。

1901年には大橋佐平が没し、1902年以降、洪江の新刊は博文館に見えない。

洪江は、1902年6月4日から劉成禺について中国語を学んでいる。「抽斎歿後」には以下のように書かれている。「六月四日今支那人劉成禺について支那語を研究す爾來三十八年七月に至るまで劉氏常に來り教ふ」(188頁)

ここに出て来る劉成禺は『世載堂雜憶』を著した劉成禺であろう。大阪経済大学の樽本照雄教授より陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』に、「1901年、香港に行き興中会に加入。日本におもむき、成城学校に入学、李書城と東京で『湖北学生界』を刊行する」旨の記述があることを御教示いただいた。

成城学校は陸軍の予備校的性格を持ち、清国からの留学生を多く受け入れていた学校である。中村義が「成城学校留学生部初期中国人名簿」として、同校の1897年7月から1903年7月にかけての留学生のリストを発表しており、その中に劉成禺の名が見える。なおこのリストでは退学／卒業、自費／官費の別および生年月日と中国での居住地のみが記され、入退学の時期等は記されていない。劉成禺についての記述は以下のとおりである。

「劉成禺 退 自費 光緒4・7・28 湖北武昌」

また影印本(『中華民国史料叢編』中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会)によって『湖北学生界』を確認したところ第3期:光緒29年1月／1903年の目次に「◎歴史廣義 劉成禺」とあった。これは本文では「史学廣義内篇」とのみ記され、著者表示はない。なお、第3期:光緒29年3月にその続稿が掲載されている。

洪江は漢学を通じて漢書に幼時から親しんでおり、師の一人である福沢諭吉の中国を重視せよという教えもあり、1881年頃に郭少泉から中国語を学んでいたようである。この時期に改めて中国語を学ぶに至った経緯は不明であるが、日清戦争を経て中日関係が変化し多数の清国留学生在が滞日するようになり、実際に中国人と接する機会が増えたこと、そして、おそらく自著が漢訳されるようになったことが、そのきっかけになっていると思われる。

株式相場で財をなし、そしてまた失った時期が1897年8月の災難以降のどの時点のことなのかを知ることは出来ないが、博文館での執筆活動が中断された後、1903年に洪江は同塵市隠名義で大学館から映画研究書『活動写真術自在』を刊行することで著述活動を再開させている。同書の発行日は8月7日。前述したように同月29日に東京瓦斯株式会社の仕事をやめているが、活動の再開に関係があるのかどうかは不明である。

また、出版社である大学館についても詳細は不明である。伊狩章『後期硯友社文学の研究』には「大学館主人の岩崎鉄次郎は紀州の人、一風変わった気概のある男だった。湖山、葵山について井上唾々が相談相手となり通俗文学書を出版した。」(211頁)と書かれている。岩崎鉄次郎については、これ以上のことは未だわかっていない。1889年に岩崎鉄次郎の名での出版が確認できるが、大学館の名前での活動が確認されるのは、1897年に刊行された受験参考書からである。1898年『実用英語』を創刊。1899年には美文集をいくつか出し、11月巖谷小波の主宰する木曜会が中心となった雑誌『活文壇』を創刊している。

1900年には永井荷風の友人として知られる井上唾々が「本郷の高等中学校(現在の第一高等学校)」を「卒業間際に同校退学、直ちに書店大学館に入社」したという。その井上は「高等中学校在学中漢文を島田篁村に」学んだといい、ここから共通の知人として島田の存在が鍵になっている可能性に思い至るが、1898年に島田が没していることから、洪江と大学館との繋がりについてはこれとは別の要因を考えるべきであろう。(井上についての記述は新井声風(義武)『明治以降物故新派俳人伝 第一輯』による)

1903年中に、大学館から再び同塵市隠名義で『動物界奇談』を刊行したほか、東海堂から『世界英雄神髓』『成功と好機会』の2冊を洪江保名義で刊行している。この東海堂から刊行した2冊に、「容安室主人」と「羽化仙史」の名が見える。これまでも「羽化仙人」の号は使われていたが、後に通俗娯楽小説を発表する際に使われる「羽化仙史」の使用が確認出来るのはこの2冊からである。

洪江は、「抽斎歿後」に「私ハ從來 著訳の書が既に百余種に及んだ 併し是れ等ハ概ね糊口の為書肆の需むるがまゝに筆を執りたるもの多く、言はゞ再び見るすら不快を感ずるのである 尤もその中に只二三の書、即ち『偉人の真相』（世界英雄神髓）の如きハ自己の年来稍や研究したる所を述べたれども他人の執筆になりたる故に筆勢も渋れるのみか我が述へたる所の三分の一も記さず故に忤んで精しからざるの感なしとせず」（192-193頁）と記しており、この『世界英雄神髓』を「他人の執筆」とするが、これはどういうことなのであろうか。「我が述へたる所の三分の一も記さず」とあるところみると、口述筆記によって成ったようでもある。これについては、以後引き続くの矢継ぎ早の執筆活動とあわせて、本文を綿密に検討していく必要がある。

1904年に刊行された洪江名義の著書は、『露西亞闇黒史』⁽³⁸⁾のみであった。「抽斎歿後」に自著としてあげられた『世界富豪成功格言』『日本武士道の神髓』は、現物にはそれぞれ「川合晋編（巻首表記：東海堂編纂）」「大日本武士道研究会編」とある。しかしながら、これらも編者の言葉、引用書目、内容から洪江が手がけたものであることは間違いない。後者の「大日本武士道研究会」は、その存在がほかの文献から確認出来ないこと、後に刊行される冒険小説の数点で、登場人物が依ってたつ組織として名が使われているところから架空の団体であったと推測される。

「抽斎歿後」には、この年の1月9日に「漢文講習会の講師となる」とあるが、詳細は不明である。3月20日から『国益新聞』⁽³⁹⁾での連載「那翁露西亞征討史」が始まったともあるが、この時期の同紙の伝存は確認できていない。

またこの年5月15日に、帝国図書館等への稿本流出のきっかけとなっているのではないかと推測される神田区三崎町1番地への転居が記録されている。

そして翌1905年、洪江保は羽化仙史の筆名で突如、小説家としてデビューし、次々とユニークな作品を発表していくのであるが、それはまた別の話である。

おわりに

蘭学、英学、仏学、独逸学、…かつて学問がジャンルではなく語学によって規定される時代があった。これはまた、ある特定の語学に通じるものは、その言語を通して得られる学問が「何でもできる」ことを要求される時代でもあった。先に引いた内田魯庵の言葉の如く「昨日は審美学を説き今日は料理法を談じ明日は海軍術を講じ」ることが求められていたのである。

明治時代を代表する出版社となった博文館は雑誌、そして雑誌のように定期的に刊行される叢書に力を入れ発展した。手製品ではなく工業製品のように書物を作り出していったのが博文館である。ここから同社は取次、印刷、製紙といった周辺産業も手を広げ、日本における一大出版コングロマリットを形成していったのである。

こうした、工業生産のラインのような出版を支えたのが、鷗外の言う「時尚を追ふ書估の誅求に応じて筆を走らせた」渋江のような勤勉な書き手であった。

『犬養木堂伝』に載せられた矢田績の回想には、慶応時代の渋江の優秀さが以下のように書かれている。

「それから成績は、犬養さんと私に渋江保、これは英学丈の競争者です。三人の内大抵は渋江に負けた。渋江が首席を占め、犬養さんが二番目、犬養さんが一番になったこともあり、三番になったこともある。僕も一番や二番になったことがあるが、比較すると渋江が一番でした。犬養さんは、渋江の奴に負けたなど言つて口惜しがつて居られたものだ。要するに、三年で英学だけ一年ばかりやつてゐると、明治十三年の暮に渋江が首席、僕がその次、この渋江は何でもよく出来た、そして卒業したが、犬養さんは卒業出来ん、それは外の学科をやらんから、卒業出来なんだ。それでも平気である。あんな証書なんかいらん、英書が読めればいゝと平気だつた。寧ろそれが自慢であつた位だ。」（110頁）

しかし、その優秀さは渋江に成功をもたらしはしなかった。時代の要求が、「何かができる」ことに移った時、渋江は、「何でもできる」がために何者にもなれない人物となって行く。

渋江はそこかしこに足跡を残している。この多方面にわたった仕事がかえって、その姿を見えなくしてしまった。これは一面、悲劇である。

内田魯庵の戯文には以下の一節もある。

「外山〔正一〕先生は勿論エラキ人なり。幸福先生も亦是れエラキ人なり。

一のエラキ人は博士となつて一つのエラキ人は博士となるを得ず。運不運は是非なければ、幸福先生敢て嘆息するを休めよ。社会は先生の大恩を決して忘れざるなり。先生自ら先生の徳あり、敢て苦情を訴ふる勿れ。」
本稿が、先人の労苦を伝えるよすがとなることを祈念して、ここに筆をおきたい。

注記

- (1) 蔵書の散逸に関する記述は稿本「抽斎歿後」152-153頁による。同稿本は渋江保が森鷗外のために執筆したもので東京大学総合図書館に所蔵されている（請求記号:H20-514）。同稿本からの引用は『森鷗外「渋江抽斎」基礎資料』所載の松木明知による翻刻の掲載頁を指示する。
- (2) 『未刊随筆百種 第5巻』中央公論社,1977年,9頁。初出は『未刊随筆百種 第十九』米山堂,1926年。
- (3) 大野洒竹と渋江家の関わりについては永井荷風による随筆「梅雨晴」にその一端が伺える。「明治四十一年わたしは海外より還つて再び島田大〔翰 島田篁村の次子〕を見た時、…島田は嘗て爾汝の友であつた唾々子〔井上唾々〕とわたしを新橋の一旗亭に招ぎ、俳人にして集書家なる洒竹大野氏をわれわれに紹介した。そのとき島田と大野氏とは北品川に住んでゐる渋江氏が子孫の家には、猶珍書の存してゐる事を語り、日を期してわたしにも同行を勧めた。されば渋江氏の蔵書家であつた事だけを知つたのは、わたしの方が森先生よりも時を早くしたわけである。唾々子は二子と共に同行を約したが、その時のわたしには新刊の洋書より外には見たいものはなかつたので辞して行かなかつた。…」『女性』（プラトン社）第4巻第4号（1923年10月1日）大野洒竹もまた、古書を集めるうちに渋江抽斎の名を記憶に留め、その子孫と接触を図つたのであろうか。当時の渋江保の住所は荷風の記述とは異なり、南品川であつた。
- (4) 注(2) 8-9頁
- (5) 『劇界雑話』(4)「嘉永五年壬子の春著者ハマダ生れぬ前〔矢島は1835（天保6）年生まれ〕」(8)「予が田之助の見納めハ明治十一年(?) 浜松で浦里を演じたのであつた〔保は東京師範学校卒業後浜松に赴任〕」(16)「明治二十何年といふ頃〔矢島は1883年没〕」
- (6) 芸海奇聞 同塵市隠輯 3冊 26cm（請求記号:35-63）同写本も矢島歿後の1889年に至る相撲関連の記録を含んでいる。また『史界奇聞』に目録のみ所載されている『柳亭筆記』についても同筆による同一体裁の写本が岩瀬文庫に伝わっている（請求記号:15-113）。
- (7) 「翻刻・『劇神僊話』」『明治大学日本文学』第12号（1984年10月5日）「〔翻刻及び解題〕『秀鶴草子』一附『劇神僊筆記』」『関東短期大学紀要』第35号（1990年12月10日）。なお一連の鹿倉論文では各受入日を一月一日とするが、これは一〇月一〇日の誤りである。
- (8) 鹿倉秀典「『劇神仙』考—寿阿弥を中心に」『近世芸芸』第45号（1986年11月5日）
- (9) 現在伝わる岩瀬文庫の図書原簿は1909年3月以降が受入順の記録であり、それ以前に受入れたものはまとめてタイトルのイロハ順に再編されている。関連本は再編された部分に掲載されているため購入年月日を特定することは出来ないが、1903年頃文庫設立を構想し、1904年から図書館設立の為に多量の本を購入していたという同文庫の沿革から、ほぼ同時期に資料が購入されていると思われる。
- (10) 「渋江保伝（上）」『境』第1号（1983年9月1日）4-20頁
- (11) 影印本を使用。『明治前期書目集成 第6分冊』明治文献,1972年所載
- (12) 影印本を使用。朝倉治彦・佐久間信子編『明治初期 三都新刻書目』日本古書通信社,1971年所載

- (13) 文部科学省史料館所蔵『明治十四年教員辞令申請綴 学務課』請求記号:24N - 929
- (14) 刊行日は書中に記された日付によったが、翌 1876 年の 1 月 14 日付けの浜松県学事課報告に「瞬養学校教員渋江保著小学授業必携刷行ニ付キ需要之巻数申出ベキ旨」が出ていることから実際に刊行された日とは多少のずれがあったと思われる。
- (15) 人脈的につながりのある『喫鳴雑誌』での署名原稿はいくつか確認できるが、同新聞上に署名原稿が確認できたのは入社後、1885 年 10 月 30 日、11 月 5 日掲載の「浜松紀行」のみである。
- (16) 『曉鐘新報』1889 年 2 月 26 日
- (17) 同書巻末に付された「博文館叢書発兌規定」には以下のようにある。
「本書ハ文学、理学、数学、法学、工学、農学、商学ヲ始メ、百般ノ技芸學術ヲ論ゼズ、苟クモ時世ニ適切有要ナルモハ政治書ヲ除クノ外ハ、総テ之ヲ專攻得意ノ名家ニ囑托編述シ、明治廿三年二月ヨリ毎月三回宛発兌スルモノナリ、且ツ本書ハ毎巻読切トナシ、郵便税ハ通信省認可ナルヲ以テ地方愛読諸君ノ便益少ナカラズ、今左ニ其既定書目ヲ掲ゲ伏シテ請フ江湖ノ諸君陸続愛顧セラレンコトヲ
既定書目 第一回 通俗學術演説 第二回 通俗法律演説 第三回 家事經濟書 第四回 通俗經濟演説 第五回 日本婦人用文 第六回 実用家禽新書 正価 一冊（紙数三百頁以上）金廿五錢●三冊前金六十八錢●六冊前金壹円廿錢●郵便税一冊二錢宛●御注文ハ前金ヲ要ス●郵便切手代用ハ一割増トス 本書ハ臨時至急ヲ要スルモノ或ハ編纂ノ都合ニ依リ紙数ノ格外増減スルトキハ正価ヲ増減スルコトアルベシ然レドモ一冊三拾錢ヲ極度トス」
- (18) 1890 年 1 月の第 1 編『家庭教育幼稚園』巻末の広告には以下のように見える。
「通俗教育全書発兌規定 通俗教育全書全部六巻毎巻密画数十個挿入 紙数一千頁 明治二十三年一月ヨリ六月迄 毎月一回宛発兌半ヶ年間ニテ完成 石版表紙美本仕立 正価一冊（百六十頁）金十二錢●三冊前金三十三錢●六冊前金六十錢●郵便税一錢宛 御注文は一切前金を要ス●館友諸君並に日本之少年購読諸君に限り一割引とす 目次 第一編 幼稚園 第二編 尋常小学校 第三編 高等小学校 第四編 女学校 第五編 商業学校 第六編 農工学校 此書は普通教育に関する諸書を編輯せるものにして、幼稚園より専門学校に入るまで順を追ひ課を定めて、戯技学理技芸歴史修身英語算術等を掲載す、其文章の簡明なる其編輯の親切なる、教育書中未だ曾て有らざる所なり、此全書を通読せば仮令学校に入らずとも其課程を卒業せしに同じかるべく、又学校に在る少年諸君と雖も之を左右に備へば、其便利は良師に就くに均しかるべし、特に婦人方も之を読み玉はば直ちに児を教ふるを得べく、仮令良師其人に乏しと雖も敢て児の教育に不足し玉ふが如きことはあらじ」
- (19) 『稿本博文館五十年史稿』請求記号:国 18-46、『博文館五十年史（初稿）』[孔版]請求記号:国 18-47
- (20) 松崎欣一「福沢書簡に見るある地方名望家の軌跡—伊東要蔵と福沢諭吉」『近代日本研究』第 18 号（2001 年（2002 年 3 月 20 日））12 頁
- (21) 「土地共有ノ不可ナルヲ論ズ」第 3 巻第 3 号（1891 年 3 月 10 日）、「土地ハ共有物ト為サルベカラズ」第 3 巻第 4 号（1891 年 4 月 10 日）、「土地ノ使用権」第 3 巻第 5 号（1891 年

5月10日)

(22) 洪江訳に先立って『日清戦争実記』第31編(1885年6月27日)～第35編(1885年8月7日)にかけて(柳井)綱齋主人訳で部分訳が掲載されている。

(23) 新刊紹介を以下に掲出する。『太陽』第1巻第6号(1895年6月)「普澳戦史 洪江保著 普澳両国旧来の関係より説き起し、普澳両国がスレースウヰグ、ホルスタインに於ける激戦奮闘を叙し、遂に普国の良相名將ビスマルク、モルトケ等の偉功によりて、歐洲に覇たる顛末を記せり、読み去て眉宇軒昂たるを覚ゆ。(定価金十八錢、發行所博文館)』『早稲田文学』第88号(1895年5月)『『普澳戦史』 博文館發行、洪江保氏著、千八百六十六年の普澳戦争を記せるもの、此の戦争たる数多の点に於て今回の日清戦争と相似たり富国強兵の実を挙げんとするに鋭意なりし普国は以て目下の我が国に較ぶべく、外交上に於ける複雑なる関係は以て対外問題の鑑となすに足る是れ本書の現れし所以、第一編普国の鋭気を叙して戦争の原因に及び、第二三編開戦前の内外の事態を明にし、第四五編両軍の戦況を写し特に軍隊の編制を明にして終に普軍の大勝を博せし顛末を叙し、第六七編両国の媾和談判、北独逸連邦同盟組織、埃伊の海戦等を叙して其の間ビスマルクの外交政略を明にし、最後に附録として普埃伊各国の兵力を掲げたり時節がら一読すべき書なり」

(24) 新刊紹介を以下に掲出する。『太陽』第1巻第8号(1895年8月)「波蘭衰亡戦史 洪江保著 波蘭の衰亡は世界の一大惨劇なり、美人の薄命、名士の数奇、何れか消魂の料たらざらん、列国外交の奇変、国家盛衰の因縁、亦志士の参考に資すべきもの多し、之を知らんと欲せば本書を読め。(正価拾八錢本館發兌)」

(25)

『普澳戦史』

「墨西哥征討ノ事ハ、近日「十九世紀史」中ニ載スベケレバ、就テ見ルベシ。(255頁割注)

『英国革命戦史』

「他日公ニスベキ『チャールス五世』ノ中ニ(12頁割注)「他日世ニ公ニスベキ『ウヰリアム一五世』ノ中ニ(253頁割注)「他日世ニ公ニスベキ『クロムウエル』ノ中ニ(297頁)

『七年戦史 フレデリック大王』

「近日拙訳『プルトーク英雄伝』ノ中ニ詳叙スベシ。(75頁割注)「委シクハ、他日世ニ公ニスベキ『フレデリック大王』中ニ載スベシ(169頁割注)「他日世ニ公ニスベキ『マールブロー』ニ詳ナリ(231頁割注)「カーライル…他日別ニ同氏著『フレデリック大王』ヲ訳述スベキ心算アルヲ以テ(232頁)「他日公ニスベキカーライル著羽化生訳『フレデリック大王、及ヒ其ノ時世』ニ就テ見ルベシ(263頁)「他日ヲ待チテ『フレデリック大王』ノ中ニ詳叙スベシ(283頁)「サンガー著『売淫史』ニハ、…他日同書ヲ翻訳シテ、之ヲ世ニ公ニスベシ(333頁)

『ピュニツク戦史』

「因ニ云フ。生曩キニリヴヰ井一。モムセン。メリヴエールノ三羅馬史。スートニアスノ羅馬十二帝紀。ギツボンノ羅馬衰亡史。モンテスキューノ羅馬盛衰記ヲ訳シテ、悉ク稿ヲ脱セリ、他日世ニ公ニスヘシ。」(序4-5頁)「委シクハ近日世ニ公ニスベキ羽化生訳『リヴヰ井一羅馬史』『プルトーク英雄伝』ニ載スベシ(8頁割注)「羽化生訳『スートニアス羅馬

十二帝紀」ノ中ニ詳カナリ。近日世ニ公ニスベシ。」(10頁割注)「近日公ニスベキ羽化生
訳『ストニアス羅馬十二帝紀』ノ中ニ」(12頁割注)「プルターク其ノ『英雄伝』…羽化
生之ヲ訳シテ既ニ稿ヲ脱セリ。他日ヲ待チテ、世ニ公ニスベシ。」(24頁割注)「[リウ
井一]『羅馬史』ハ、生之ヲ翻訳セリ。近日世ニ公ニスベシ。」(46頁割注)「近日世ニ公ニスベキ
羽化生訳『プルターク英雄伝』『モムセン羅馬史』『ストニアス羅馬十二帝紀』等ノ中ニ
詳ナリ。」(218頁割注)

『歴山大王一統戦史』

「近日世ニ公ニスベキ羽化生訳『プルターク英雄伝』」(10頁割注)

「近日公ニスベキ『希臘史』」(13頁割注)「近日公ニスベキ『希臘神代紀』」(40頁)「他日
世ニ公ニスベキ『希臘史』」(47頁割注)「他日プルターク著『英雄伝』ヲ翻訳シテ」(66
頁割注)「カーシアス…其ノ著『歴山史』ハ、羽化生悉ク翻訳シタリ。大部ナルヲ以テ未
タ世ニ公ニスルノ機会ヲ得ズ。」(95頁)「他日公ニスベキカーシアス著『希臘史』ノ中ニ」
(125頁)「羽化生著『希臘英雄冒險譚』」(146頁)「羽化生訳ヒロドタス史記第八章四十七章
ニモ載セタリ」(171頁割注)「羽化生著編纂『希臘神代紀』」(261頁)

『希臘波斯戦史』

「予ノ翻訳ニ係レル『ヒロドタス史記』『グロート希臘史』『プルターク英雄伝』ノ中ニ載
セアレバ就テ見ルベシ三書ハ近日世ニ公ニスベシ」(序文2頁)「他日公ニスベキ『グロート
希臘史』ニ就テ知ルベシ」(28頁)「羽化生訳『ヒロドタス史記』及ヒ『グロート希臘史』
伝ニ於テ」(31頁)「羽化生訳『グロート希臘史』ノ中ニ詳ナリ」(123頁)「羽化生訳『プ
ルターク英雄伝』ニ就テ看ルベシ」(130頁)「ヒロドタスノ『史記』ニ…委シクハ予ガ訳
書発兌ノ日ニ參看セラルベシ」(163頁)「羽化生訳ヒロドタス『史記』及ヒ『プルターク
英雄伝』ニ就テ知ルベシ」(177頁)「ヒロドタス著『史記』第八章第二十六節ニ載セタレ
バ、就テ看ルベシ」(217頁)「ヒロドタスノ『史記』ハ、羽化生曾テ訳シタリ。他日世
ニ公ニスベシ」(286頁)「予ノ翻訳セルブルーム子著『上代希臘人家内ノ生活』ニ於テ見
ルベシ」(296頁)

- (26) 博文館は1896年に幸田成友訳の『十九世紀史』を發行している。
- (27) 「新書介紹 仏国革命戦史○日本渋谷保著人演社社員訳法国為欧州文明之母法国革命為
法国文明之母而第一革命尤為母中之母是書詳紀當時宮廷之淫亂政府之腐敗小民之困憊志士
之堅貞暴徒之激烈其善現象則部署国 制定憲法其惡現象則斷屍遍野慘血塞渠凡革命之如何
着手如何進步如何失敗歷歷如繪近者革命風潮大有渡重洋而捲人中国之勢今日之現象善乎惡
乎將來之結果成乎敗乎愛國之士不可不一窮其因果也諷筆淋漓活發足令讀者且憤且喜洋裝一
厚冊定價大洋七角上海益智文明開明均有寄售」『蘇報』第2499号(光緒29年5月念8日/
陽歷1903年6月3号)
- (28) 東京都公文書館所蔵『第一種・第三課文書類別・学務・各種学校ニ関スル書類2冊ノ内
2』請求記号:622.D5.14 府明II
- (29) 文教大学越谷図書館所蔵『周禮一卷』請求記号:123.41 - N64
- (30) 東京都公文書館所蔵『第一種・第三課文書類別・学務・府立学校、学事統計ニ関スル
書類』請求記号:623.A4.01 府明II

- (31) 東京都公文書館所蔵『第三課文書・学務・統計・官房1巻』請求記号:623.C2.10 府明II
- (32) 東京都公文書館所蔵『第三課文書・学務・各種学校・官房2巻』請求記号:623.C2.11 府明II
- (33) 東京都公文書館所蔵『第三課文書・学務・各種学校・官房1巻』請求記号:623.C2.08 府明II
- (34) 東京都公文書館所蔵『文書類纂・学務・第十六類・学事統計・1巻』請求記号:624.C3.13 府明II
- (35) 『読売新聞』第9046号(1902年8月27日)「◎義道館の拡張 根本通明翁の監督の下に属する漢学義塾義道館ハ今回小石川伝通院前に移転し大に規則を改正し職員を増加し根本博士自ら教鞭を取る由」
- (36) 『読売新聞』第9548号(1904年1月12日)「小石川区表町なる同館ハ老儒根本通明翁の家塾なるが寄宿舎を増設して青年子弟の監督に任じ且今後一週二回易経、書経の講筵を開き老翁自から臨席する筈なりと云ふ」
- (37) 東京都公文書館所蔵『第一種・文書類纂・学事・第七類・私立学校・5巻』請求記号:629.A5.13
- (38) 『書籍新報』第24号(1904年5月15日)に新刊紹介が見える。「露国は茨の如し、其戦端を開かざる前は、只美しき花と芳はしき香とを賞するが如く強大なり文明なりと遠敬的望見するに過ぎざりしが、今事茲に至るに及び、其真価は表示せられぬ、……新聞に雑誌に書籍に、野蛮なる露国の内情は発かれつゝあり、中にも此書は其題号よりして既に闇黒史と云ひる如くにて、先づ第一に、露は地理上より推すも、各国に比して不便此上なき事を例証し、次いで累代の帝王、皇后、皇子皇女等が淫慾是れ事として醜声普く伝はり、而かも行政残忍苛酷にして人權を顧みず、実に紊乱其極に達したり、帝室猶ほ此獸行を姿にするが故に、下小官吏の果に至る迄悉く腐敗のドン底に沈み、延いては一般の人民に至る迄懶惰の性を増長し、淫靡の風を布衒し、専ら酒色に沈溺するの悪習以外に何等善良なる事項を精励するなく、宛然露は動物園の情態なりし歴史を秩序的に縷述して余す所なきが如し、実に露は此書を見る迄もなく、清潔なる歴史は作り得べくもあらず、……乞ふ苟も吾等が敵国となす露を批評し且研究せんとする者は、斯かる書を読み、彼が国力の欠点那辺にあるかを確かめ置くの要はあるべし、否徒らに露は野蛮也横暴也と云ふとも根拠あるの批評とは為し難ければ也」
- (39) 『国益新聞』は天狗煙草でその名を知られる岩谷松平が『二六新報』によるネガティブ・キャンペーンの業を煮やし、対抗紙として発刊した新聞であることが以下の『読売新聞』第8771号(1901年11月25日)四面の記事より知られる。「▲岩谷松平の機関新聞岩谷松平は二六新報の攻撃を防ぐ為め、国益新聞といふのを発行して、筆陣を張るとかで、其の事務所を木挽町一丁目に置き不日第一号を出すと」しかしながら明治新聞雑誌文庫に所蔵されている原紙を見る限りでは同紙と岩谷との関係は次第に薄れていったようである。

引用および参考文献

- 浅井康男「五〇年目に甦った『稿本博文館五十年史』」『出版ニュース』第1421号（1987年4月）
- 新井声風（義武）『明治以降物故新派俳人伝 第一輯』あかね社,1932年
- 荒木伊兵衛『日本英語学書志』創元社,1931年
- 伊狩章『後期硯友社文学の研究』矢島書房,1957年
- 今井宏『明治日本とイギリス革命』筑摩書房,1994年
- 江見水蔭『自己中心明治文壇史』博文館,1927年
- 大田兼雄「羽化洪江保翁伝資料のために（五）」『易学研究』第12巻第1号（1959年1月）
- 大田兼雄「羽化洪江保の著作」『日本古書通信』第28巻第9号（1963年9月）
- 大沼宜規「稀本あれこれ（398）」『国立国会図書館月報』第479号（2001年2月）
- 金秉喆『韓国近代翻訳文学研究』乙酉文化社,1975年
- 金鳳珍「『近代』における東アジア知識人の国際政治観」『北九州大学外国語学部紀要』第87号（1996年9月）
- 『国立国会図書館所蔵自筆本・書入本目録稿』1962年
- 『国立国会図書館貴重書解題 第一巻』1969年
- 実藤恵秀監修／譚汝謙主編／小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社,1980年
- さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房,1981年
- さねとうけいしゅう『増補中国人日本留学史』（増補版第2刷）くろしお出版,1981年
- 澤田哲「開化期の教科書編纂者としての玄采」『韓』（韓国研究院）第109号（1988年2月）
- 洪江保「根本通明翁」『独立評論』第2巻第1号（1914年1月1日）
- 『章炳麟集』岩波書店,1990年
- 谷沢永一「司馬さんの書庫・蔵書を探検する」『読書人の点燈』潮出版社,1997年
- 「書誌」『定本花袋全集別巻』臨川書店,1995年
- 樽本照雄『新編増補 清末民初小説目録』齊魯書社出版,2002年4月
- 坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館,1937年
- 坪谷善四郎『大橋新太郎伝』博文館新社,1985年
- 『東京ガス百年史』東京ガス,1986年3月
- 仲新〔ほか〕編『近代日本教科書授業法資料集成』東京書籍,1982-1983年
- 長沢規矩也「宋刊本展覧会陳列書解説」『長沢規矩也著作集 3巻』汲古書院,1983年
- 中村義「成城学校留学生部初期中国人名簿」『史海』（東京学芸大学史学会）第31号（1984年6月）
- 中山久四郎「章炳麟と日本人」『斯文』第22号（1948年9月）
- 松井柏軒『四十五年記者生活』博文館,1939年
- 松木明知「森鷗外「洪江抽斎」基礎資料」,第86回日本医史学会,1988年
- 宮内俊介『田山花袋書誌』桜楓社,1989年
- 森鷗外「伊沢蘭軒」『鷗外全集 第17巻』（2刷）岩波書店,1988年
- 森鷗外「澀江抽斎」『鷗外全集 第16巻』（2刷）岩波書店,1988年
- 森銚三「後は昔物語雑考」『森銚三著作集 11巻』中央公論社,1971年

矢田績「其頃の犬養さん」木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝 上』東洋経済新報社,1938年
(ふじもと なおき 主題情報部古典籍課)